

地底宮秘記



The Secret Chronicles of The Underground Palace

一

ヴェネルロック家の屋敷はサンジェリイの北東の外れにあった。エル・ゴ・ドナ近くの金鉱で財を成した先祖が建てた家らしいが、今は荒れるに任せてある。大きく張り出した玄関屋根を覆う緑から垣間見える精緻な彫り物がかつての栄華を伝えていたが、果てしなくのびる蔦や屋敷を囲む木々が遠からずすべてを飲み込んで行くことは違いないと思えた。

風雨にさらされて白茶けた扉は見上げるような高さがあった。框では石造りの小鬼が鶴嘴を構えて不機嫌な様子で私を見下ろしていた。招かれざる客には振り下ろすつもりなのかもしれない。必要以上に大きな真鍮の叩き金を鳴らすとしばらく間があつて扉が開いた。

屋敷と同じくらい年古りているように見える白髪の男がしわがれ声で私を出迎えた。

「スナブ・ランケン様ですね。お待ちしておりました」

執事らしき老人は右足を幾らか引きずりながら私を家の中に招き入れた。

玄関広間はがらんとして広く、焦げ茶色の壁には何枚かの古ぼけた肖像画、虫食いの跡のある大きな絵織物——どうやら鉱山の様子を描いたものらしい——が飾られていた。広間には黴と埃のにおいが染みついていた。突き当たりに大きな階段があった。金茶の絨毯が敷かれていたが、角がこすれて白くなっていた。そこを眼鏡をかけた女が降りてきた。乳色の肌をした細身の身体に色の褪せたような卵色の衣裳をまとっている。袖口と裾に大きな襷と縫い取り飾りのついた意匠は随分と古風に見えた。絨毯と似た色合いの金茶の波打つ髪には金の飾り櫛が光っていたが、それもまた古い代物のようだ。髪はきれいに梳かれているとはいえず、ほつれ毛が目立った。化粧っ気はないが、小さな唇にだけ真っ赤な紅を引いている。

「御足労いただき、ありがとうございます。アクヌス・ヴェネルロックです」

女は幾らかかすれた声でそう言った。眼鏡は六角形の細い鉄縁で、薄い硝子の中に切れ長の目が収まっていた。伏し目がちの瞼の下に鳶色の瞳が見えた。

卵色の服の開いた胸元からのぞく乳色の肌は生地と同じような濁りが感じられた。薄い胸乳の上に重たげな金の首飾りが光っていた。

「幽霊屋敷のようで驚きになったでしょう」

アクヌスは赤い唇の端にわずかな笑みを浮かべた。

「これだけのお屋敷を保つにはさぞご苦労があるでしょう」

「私はもう諦めているのです。いずれ木々が、草葉が屋敷を覆い尽くし、

鳥や獣がこの地の主となることでしょう」

女はまた自嘲の笑みを作り、私を奥の書齋らしき部屋に案内した。三方の壁を覆う書架には無数の本が並び、縦長の窓を背にした大きな机の上にも本が積み上げられていた。

部屋の真ん中に小振りの円卓とゆつたりとした椅子があり、私とアクヌスは向かいあって座った。老いた使用者がこれも年代物らしい白い急須と茶碗を持って来て、赤い色のお茶を注いだ。

「ソブリオ茶です。南の方で採れるものです。近頃はあまり飲まれないようですが、お口にあいますかどうか」

赤いお茶はかすかに甘い香りがしたが、味はほとんどわからなかった。蛇革のヤムラスが愛飲しているものとは違うものらしい。私は曖昧にうなずき、仕事の話始めた。

「弟さんを捜して欲しいというお話でしたね」

「ええ、そうです。地下に潜ったまま帰らない弟を捜し出して欲しいのです」

アクヌスは湯気の立つ茶碗を手にしたまま、なくした指輪を捜して欲しいと言っても言うように答えた。

「地下に、ですか」

探偵局に届いた依頼状には単に行方知れずの弟を捜して欲しいとしか書かれていなかった。

「ええ、地面の下です」

そう言っただけで女は茶碗を円卓に置き、眼鏡の奥で視線を下に向けた。

アクヌスの話によると、弟——ネルアスという名で七つ下の二十歳になる——はヴェネルロック家の祖先が蓄えた黄金を地底に隠したという言い伝えを信じて探索に向かったまま、もう十日も帰らないのだと言う。

「弟はその先祖の黄金を使って、新しい金の鉱脈を見つけ出し、ヴェネル

ロックの家にかつてのような繁栄を取り戻せると考えたのです」

「知る限りでは、サンジェリイ近辺の金脈はもう掘り尽くされているというのが定説だと思いますが」

ネルアスはこの書齋に残された一族の古文書を調べている内に、隠された黄金と秘密の鉱脈に関する記述を発見し、それに夢中になったのだとアクヌスは言った。

「弟は地下の黄金に取り憑かれているように見えました。屋敷はご覧のような有り様ですが、私たち二人がなんとか暮らして行けるだけの蓄えは、かろうじて残っています。ですから、私はそんな危ないことは止すようにと幾度も言ったのですが、弟はどうしても聞き入れませんでした。それで、地下に潜ったまま戻らないのです」

「弟さんは一人で行ったのですか」

アクヌスは「ええ」と言っただけでうなずいた。

「誰かと一緒では、黄金と鉱脈の秘密を知られてしまう、そう言っただけで行ったのです。お恥ずかしい話ですが、私たちの二親はある商人に騙されて、蓄えの大半をとられてしまいました。幸い、この家は残ったものの、二人とも心労のあまり相次いで亡くなりました。弟がまだ子どもの頃です。それで弟は人を信じない人間になったのです」

彼女は自分もそういう人間なのかどうかは語らなかつた。ネルアスは数日分の食料と水、角燈に綱などを持って出立したと言う。

「地下に潜ったと言いますが、古い坑道にでも入っていったのですか」

「いいえ、そんなところには行っていません」

「では、どこから地下に入ったのです」

「この屋敷からです」

女はまた視線を床に落とした。少し隈のできた瞼の下で目が動くのがわかった。

彼女は立ち上がると書齋の隅に行つて花のない花瓶をずらすと、その下の四イート（約一・二メートル）四方ほどの敷物をまくり上げた。床の上には鎖と錠前がついた四角い扉が現れた。

「父母と違い先祖は少しは用心深い人間だったのでしょ」

アクヌスは隠しから錠を取り出すと錠前に差し込んだ。鎖を引き抜き、

床の扉を引き開けると、土臭いにおいが漂ってきた。四角い穴には急な階段がついていたが、その下は漆黒の闇だった。

女は書架の片隅に置いてあった角燈に火を入れた。

「この下はもう一つの書齋になってるのです」

角燈を手にしてアクヌスは階を降りていった。後をついて降りるとそこは確かに第二の書齋だった。地上のものよりはずっと小振りだが壁には書棚が設えてあり、大きな洋灯が置かれた机と椅子があった。アクヌスは角燈の火を洋灯に移した。光の輪が広がり、地下の書齋を照らし出した。上階と違って書架には隙間も多かった。鍵付きのひどく古びた大判のものや、紐で綴じられたもの、製本されていない朽ちかけた紙束、それに巻物などが置かれている。机の上には薄板の表紙に紐綴じの本が開いたまま置かれていた。綴じ紐は解かれていた。

「ネルアスはここで何代か前の先祖が書き残した隠された黄金と新しい鉱脈に関する記述を発見したのです」

彼女の弟は子どもの頃から屋敷の外に出ることを好まず、長じては大半の時間を地上と地下の書齋で過ごしていたとアクヌスは言った。

「どこか体の具合でも悪かったのですか」

「そういうわけではありません。ただ、長い時間外光にあたるのが好きではなく、人付き合いも得意ではないのです」

「そういう人もいますね」

私は机の上の古びた本に目をやった。手書きの原稿を綴じたもので、古めかしい書体からしてクアロニアン帝国の時代——およそ二百年前——のもののように見えた。読み難い文字を追うと「我、一族の後代の繁栄のため、地の神よりの授かり物をその懐に埋め戻さんとす」というところまで頁が終わっていた。開かれたもう片方の頁には「いつの日か、この新たな金色の恵みが陽光を浴びて輝くことを我は望む」とあり、そこで記述は途絶えていた。

「ふむ、肝心の部分がないようですね」

「ええ、弟が持っていったのです」

写しはあるかと訊くと彼女はなと答えた。読んだことはあるかと尋ねると、やはり、ないと答えた。

「ただ、弟から幾度も話は聞かされています。ですから、だいたいのこと

はわかります」

「だいたい、ですか」

「ええ」

手稿を書いた先祖についても訊いてみたが、署名もなく、家系図も失われていて、名前もわからないと彼女は言った。

「この部屋にも隠し階段があるのですか」

部屋の中を見渡したがそれらしいものは見当たらなかった。絨毯は敷かれていない。

「こちらです」

アクヌスは机の右手の書架に手をやった。どこかで小さな固い音がした。それから彼女は書架を横にずらそうと手をかけた。

「重いのです」

私は依頼人に手を貸し、書架を横に引いた。軋む音がして、書架が三メートル（約九十センチ）ばかり動いた。真っ暗な罅が開いていた。土と黴のにおいがした。

アクヌスは角燈を手を闇の中に入れていった。石積みで覆われた通路で上部は迫持になっている。道は緩やかに下っているようだった。

しばらく進むと不規則な円形の部屋に出た。差し渡しは十五メートル（約四・五メートル）ほどだろうか。円天井のようだが、暗くてはつきりしない。部屋の中央に腰の高さほどの円形の井戸のようなのがあった。大小の石を積んで作られており、中は闇に包まれていた。井戸には繩梯子が垂らされていて、端は床に埋め込まれた太い鉄輪につながれていた。

「ここから弟は地底に降りたのです」

アクヌスは角燈を井戸の上にかざしたが、石積みがしばらく見えるだけで、何もわからなかった。私はあたりから小石を拾い、落としてみた。幾ら待っても水音も他の音も聞こえては来なかった。

「底なし井戸ですか」

「井戸なのかどうか。地底への出入り口らしいのです」

「この下にご先祖が隠した黄金があるのですか」

「そのはずです」

「新しい金鉱脈ですか」

「そこへつながる隧道があるらしいのです。街の外のかつての坑道ともつ

ながっているようです」

彼女の話によれば、クアロニアン帝国時代の先祖は新しい鉱脈を発見したものの、あまりに深く、掘削には非常な危険と費用を伴うことが予想された。間もなく帝国は滅び、混乱の中でそれは忘れ去られたのだと言う。

「危険とは、落盤や出水ということですか」

「おそらくは」

私はアクヌスから角燈を借り、「井戸」の周囲を探った。ネルアスのものと思しき足跡が幾つか見つかった。それ以外にも何かの足跡らしきものが見受けられたが、確とはわからない。それは靴の跡ではなく、獣の足跡のようにも思われたが、はっきりとはわからなかった。床の鉄輪は古いものに思われた。地底への出入りのためにずっと使われていたのだろうか。

ファバーン剣を半ばまで抜いてみた。刀身の神秘文字がわずかに青緑色の光を放っていた。掌への感触はほとんどなかった。古の魔剣には妖しい気を感じ取る力が残っているが、必ずしも確実というわけではない。

「井戸」からはかすかに風が立ち昇っているように感じられた。どこかで地上とつながっているのだろうか。

私たちは地下の書齋に戻り、それから地上の書齋へと戻った。赤いお茶はすっかり冷めていたが、頃合いを見計らったように執事が別の急須を持ってきた。

「どうでしょう。お引き受けいただけますか」

「弟さんを捜すということなら、やってみましょう。ですが、隠された金塊を探し出すとか鉱脈探しとか、そっちには関わる気はありません。僕は鉱山師ではありませんから」

「結構です。私は弟が無事に戻ってくればそれで良いのです」

アクヌスは手ずから湯気の立つ赤いお茶を私と自分の茶碗に注いだ。

「井戸の奥について、弟さんから聞いた話を教えてください、なるべく詳しく。できれば絵図でも描いてくれるとありがたいのですが」

「それはできません」

彼女は無表情にそう言う白い陶の茶碗からお茶を一口飲んだ。

「あなたも弟さんと同じで人を信じない口ですか」

「そうです。地底の道は私が案内します」

私もお茶を口に運んだ。甘い香りが鼻についた。

「あなたも地下に降りるといいますか」

「そうです」

彼女は淡々とそう答えた。

二

その夜はヴェネルロック邸に泊まった。夕食は豪華とは言えないが、皿や碗は精緻な絵模様で飾られ、匙や肉叉は銀製だった。食後にはまた赤いお茶が出された。

地底に降りる準備はすでに整っているとアクヌスは言った。長い綱、角燈と油、鶴嘴、干し肉や乾麺、水筒、薬、その手のものだ。

与えられた二階の客間には天蓋付きの大きな寝台があった。四隅の柱には手の込んだ彫り物が施されている。幾らか黴臭い寝床に横たわり、天蓋を見上げるとそこには濃紺に銀の星々と金の月が古めかしい筆致で描かれていた。

窓の外では本物の三日月が鋭く青い光を放っていた。月光の中にほっそりとした人影が忽然と現れた。部屋の青黒い闇から生まれ出たようだった。六角形の眼鏡の縁が光って見えた。

アクヌスは音もなく寝床に滑り込んできた。

「どういふつもりです」

「あなたが信用できる人間か確かめに来ました」

そう言いながら、彼女は私の胸を細い指で撫で回した。

「床を共にするとそういうことがわかるとでも」

女は小さく笑い、胸から喉へ生暖かい唇を這わせた。

「多分」

「だいたい、おそらく、多分、そういうのがお好きなようで」

「そうかもしれませぬ」

唇が重なるど仄かに赤いお茶の甘い匂いがした。

アクヌスは私の体を撫で回しながら、羽織っていた白い寝衣を脱ぎ捨てた。小振りの高く突き出した乳房が目に入った。彼女は私の上に跨ると、激しく腰を動かした。思いの外大きな嬌声と古い寝台が軋む音が部屋

に響いた。眼鏡をかけたままだったので、白い裸身をのけ反らせると、硝子に月が映った。

翌朝目覚めると一人だった。執事が朝食の用意ができていると伝えに来た。私とアクヌスは何事もなかったかのように食事をとり、出立の準備を整えた。

アクヌスは黒い肉襦袢の上に黄土色の膝丈の洋袴、揃いの裾の短い上衣、茶の深靴という出で立ちだった。薄青い大きな肩掛鞆に荷物を詰めている。昨日の古めかしい衣裳よりもこちらの方が好ましく見えた。私には黄白色の背負い袋が用意されていた。

地下の書齋に降り、井戸のある部屋に向かった。アクヌスの話によるとしばらく降りると井戸の壁から突き出した岩棚があり、そこから横穴がのびているのだという。

揺れる縄梯子に足を掛け慎重に降りていくと、三十イート（約九メートル）も下った頃だろうか、腰に下げた角燈の灯がそれらきものを照らし出した。岩棚といっても、一イートばかり壁の岩が突き出しているに過ぎない。その上にちようど一人一人が通れるほどの黒い穴が口を開けていた。

私は岩棚に足を掛け、横穴に入り込んだ。湿った壁は石積みではなく、岩を掘って作られたものようだった。

上に声をかけると、しばらくしてアクヌスが降りてきた。彼女は怖れる素振りも見せずに、存外身軽な動きで横穴に飛び込んできた。

「怖くはないのか。底なし穴だろう」

「ネルアスも来た道ですから。作ったのは我が家の先祖ですし」

女は平然としてそう答えた。

油を節するためにアクヌスの角燈を消し、私たちは横穴を進んだ。黴臭い空気にはかすかな動きが感じられた。横穴は進むにつれて少しずつ広くなっていくようだった。二度三度、左右に曲がる場所があったが、枝分かれはしていない。

「ずっと進んでいくと広いところに出るはずですよ」

そう女は言ったが、横穴はどこまでも続いているように思われた。私と彼女の足音、角燈の燃えるかすかな音、それに二人の息の音だけが聞こえ

た。

ファバーン剣の柄に触れてみたが、あるかなきかの感触しか伝わっては来なかった。

「ご先祖様がこの穴の奥に黄金を隠したとして、あの井戸は誰が掘ったものなんだ」

「わかりません。ずっと以前からあったもののようなのです。屋敷が建てられたよりも古くからのものかもしれません」

「この横穴はご先祖様が掘ったのかい」

「わかりません。弟は何も言っていないませんでした」

「この横穴はどこまで続いているんだ」

「わかりませんが、ずっと進んでいけば良いのです」

私は横穴の壁にも注意を払って歩いたが、彼女の弟が残したらしき痕跡は見当たらなかった。足下も岩場なので、足跡は残らない。道はわずかに上っているようにも感じられた。

どれほど進んだのか、横穴は私とアクヌスが並んで通れるほど広いものになっていった。足下も壁もより平らに削られたものとなり、天井は明らかに弧を描いている。

壁には所々に壁龕らしきものがあり、石像が安置されていた。角燈を近づけてみたが、長虫が絡み合ったようなもの、鉤爪のある大きな腕が何本も生えた獣、鎌首をもたげた蛇ならぬ芋虫のような姿等々、奇怪なものばかりだった。

「ご先祖様は〈失われた神々〉でも崇めていたのかい」

「クアロニアン帝国時代の遺物があるような話を弟はしていました」

アクヌスは私同様、壁龕の中のものに注意を払っているようだったが、彼女の角燈には灯は点っていないかった。

「君は夜目が利くのか」

「少しだけです。弟はもっと」

やがてアクヌスは壁龕の一つの前で立ち止まり、小さく溜め息をついた。壁の凹みの前には一イート（約三十センチ）ほどの石像が転がっていて、何本もある蛇のような首の幾つかが折れていた。壁龕の奥は掘り返されておおり、岩の欠けらや土塊が山になっていたが、昨日今日掘り返されたもののようには見えなかった。その奥にさらに頭二つ分ほどの空洞があっ

たが、角燈を寄せてみてもそこには何もなかった。

「七つ首の地龍に守られし岩屋の奥に地の底の恵みあり。地龍の刃、其を守りて盗人に牙を剥く」

アクヌスが小声でそう独り言ちた。私は剣先で転がっている幾つかの石像の頭を検分した。刺のある蛇のような頭の口の中で石ではないものでできた小さな牙がちらりと光った。ファバーン文字が一瞬緑に瞬いたが、すぐにそれは消えた。

「先客がいたようだね。それもだいぶ以前のようだ」

「帝国が崩壊した後、先祖は混乱を逃れてこの屋敷を離れていた時期があったそうです。その頃盗まれたのかもしれない」

「某かの呪文で守られていたのかもしれないが、今はその残滓しかない。その時代なら食い詰めた魔道士が盗賊に加わってもおかしくはない」

アクヌスはもう一度溜め息をついた。

「さて、次は秘密の金鉱脈か。この先は何があるんだ。知っているなら教えてくれないだろうか」

アクヌスは気を取り直すように軽く頭を振り、答えた。

「御堂があるはずだ」

私は振り返り、横穴に並んでいる壁龕と奇怪な石像に目をやった。この横穴は何かを祀る場所への通路なのだろうか。

「ヴェネルロック家はいつたい何を崇めているんだ」

「今は何も。昔は地の神とか山神とかを祀っていたようですが」

少し進むと行く手に平らな壁らしきものが見えた。行き止まりなのか左右どちらかに道が折れているのか。近づくほどどちらでもないことがわかった。行く手をさえぎっているのは壁ではなく扉だった。

扉の前は半円形の小部屋のようになっており、腰までの高さの石の台が置かれていた。ちょうど一人一人が横たわれるほどの大きさで、縁の部分には見覚えのない文字らしきものがぐるりと刻まれていた。台のまわりには人骨が散らばっていたが、古いもののようにだった。

「御堂というのは人身御供を捧げる場所なのか」

「知りません、そんなことは」

アクヌスは散らばる骨を見て、眉をひそめた。

石の台の奥の扉は両開きで、浮き彫りのある石柱の框に嵌まっている。

扉そのものは頑丈な木で作られており、金物の取っ手がついていた。

框の彫り物に角燈を近づけてみると、人とも獣ともつかないものの姿や石の台と同様の文字らしきものが彫り込まれていた。

私はアクヌスに角燈を渡し、下がっているように言った。ファバーン剣を近づけると刀身の神秘文字がおぼろに緑に浮かんで見えた。右側の扉は人が通り抜けられるくらいに手前に開いていた。床を見ると、積もった土埃が半円形にかき取られた跡があった。

「弟さんはここを通ったみたいだね」

「ええ」

私は剣を片手に持ち、扉に手を掛けた。扉は今以上には開かなかった。

アクヌスが角燈を突き出したが、見えるものは崩れた岩と土の塊だけだった。中央部に人間がかりうじて通れるほどの隙間があるのは、彼女の弟が作った道だろうか。私たちは扉の隙間に身を押し込むようにして、中に入った。扉から隧道が奥へとのびていたらしいが、大きく崩れている。その中にかろうじて進める道が作られている。

私たちは時に鶴嘴を使って行く手をさえぎる土砂をかき分け、進んだ。平坦な場所はなく、膝をついて進まなければならぬ箇所も幾つかあった。時折、上から小石が落ちてくると、ここで生き埋めになる恐怖に冷や汗が噴き出した。

「これがずっと続くのか」

アクヌスが私の後ろで息を切らしながら答えた。

「わかりません。ここは曲がりくねった隧道が続いているはずですが、地震で崩れたのかもしれない」

「ああ、そうだろうね。それでその先は」

「死者の街がある」と

「ふむ、結構な場所らしいね。たどり着いたらの話だが」

崩壊した隧道がどれくらい続いていたのかはわからない。無限に這いずりまわり、鶴嘴を振るっていたような気がしたが、実際にはたいした距離ではなかったのかもしれない。やがて胸ぐらまである岩塊を乗り越えようと、目の前が開けた。

奇妙な風景が広がっていた。そこにあるのは街だった。ひび割れた石畳の道、左右に並ぶ傾いで朽ちかけた家々。サンジェリイのどこかの通り

が半ば廃虚となつてそこにあるようだった。

角燈の灯で見えるのは手前の家々だけだった。だが、その奥にもところどころに黄色い灯が点っているのが見えた。

「これが死者の街なのか」

彼女は曖昧に首を横に振った。

「そういう場所があるとしたら」

「死人がわざわざ灯を点けたりするかね」

地底の街は二階屋の屋根ほどの高さの岩室に広がっているようだった。私たちは地底の街に足を踏入れた。どうやら左側の建物は薬屋、右側の建物は花屋らしい。傾いだ看板や転がった薬瓶、枯れた花束がかつての姿を示していた。看板の意匠や文字からすると、それらはかなり古い時代のものようだった。百年はたっているだろうか。

私たちは波打つ石畳の道を進んだ。灯は店先に掲げられた洋灯や傾いだ街灯に点されていた。服屋の店頭では朽ちた衣裳をまとった張り子の人形が永遠の微笑みを浮かべ、陶器商の店では頭が半分欠けた陶の猫が割れた皿の中に座っていた。

その時、突然楽の音が響いた。私は剣を構えなおし、四方に目をやったが動くものの姿はなかった。

「弟さんは何て言つてた」

「アクヌスはただ首を横に振つた。」

「僕の後ろから離れるな」

楽の音はどうやら手風琴のものらしかった。哀調を帯びた、だが滑稽味もある旋律を奏でているが時折音が外れて、名手とは言い難かった。

私はその曲に聞き覚えがあることに気づいた。子どもの頃の流行り歌、曲馬団の公演か何かで聞いた覚えがあった。

音楽は私たちの行く手から聞こえてくるようだった。少し行くと道は四つ辻になつていた。左右の道は何軒か先で岩壁に飲み込まれている。四つ角の右奥に傾いたデリン灯があり、青みがかつた光が明滅していた。その下の壊れかけた長椅子に灰色の髭を伸ばした男が座つて、小振りの手風琴を奏でていた。頭に薄汚れた縁なし帽を被り、灰色の襦袢をまとうている。

男は私たちに気付いて、手を止めて顔を上げた。深いしわの刻まれた顔

は青白い。

「珍しいのう、また客人とは。ここに来るのは儂のように世を捨てた人間だけかと思つておつたが」

「アクヌスが一歩前に出て老人に話しかけた。」

「誰かが最近ここを訪れたのですね。ネルアスという名の若い男ではありませんか」

男は骨張つた手を振つて「名前など知らない」と言った。

「儂が知っているのは、あんたらみたいなの荷物を持った若いのがここを通つていったつてことだけさ」

「それは幾日前のことですか」

男は手風琴を鳴らした。それはまるで人の笑い声のように聞こえた。

「お天道さまのいねえ地の底で、日にちも何もあるわけないだろう。まあ、割りと近頃だということだ」

「その人と何か話はしましたか」

「アクヌスの問いに男は答えた。」

「少しだけな。ここは死者の街か、それともグルーアンか、と聞くから、いや、どちらでもない、ここはレオネイブだと教えてやつた」

グルーアンという名には覚えがなかったが、レオネイブという街の名はかろうじて記憶にあつた。

「レオネイブ、レオネイブ、そうか、ここはロッズメットの大地震で地の底に沈んだ街だ」

男は私の言葉に興味はないようだった。

「そうかい、儂は知らんよ。そのデリン灯の柱にそう書いてある。だからレオネイブだ」

私はアクヌスに無言で問いかけたが、彼女はこの地底の街の名を知らないようだった。

「百五十年ばかり昔、ロッズメット王の時代に大地震があつて地面に大穴が開き、街が一つ地の底に沈んだ。それがレオネイブ街だ。完全には埋もれず、こうして残っている部分があるのは奇跡のようなものだろうね」

「アクヌスはうなずいたが、手風琴の男同様、さほど興味を惹かれないようだった。」

「灯を点したのはあんたか。ずっと一人でこの街に住んでいるのか」

老人はまた手風琴を鳴らし、軽やかな律動を奏でた。少し鳴らすと手を止め、聞き耳を立てるように耳に手を当てた。

「どうやら今はそうらしい。太鼓や提琴の音が返ってくることもあるがな、まあ、空耳かもしれん。影のようなものを見ることもあるが、はっきり姿を見たことはない。それでいいんだ。世捨て人の街だからな、ここは。まあ、死者の街と呼んでも間違いとは言えんか」

アクヌスが若い男はどちらへ行つたのかと訊くと、老人は街の奥の方を指差した。

「死者の街はこの先にあるはずだ、とか言つてな、行つちまった。ここらで満足しておけばいいものを」

街の奥はどうなつていのかと尋ねると、老人は曖昧な答えを返した。「追つて行くのか。あんまり奥まで行くとな、世を捨てるどころか命を捨てることになるかもしれん。せいぜい気をつけることだな」

「あんたの空耳仲間以外にもここには誰か、いや、何かいるのか」

「儂同様、お天道さまとは気が合わない連中が、たまにごそごそやつていゝる。儂の手風琴を誰かが聞いているような気もする時もある。齧られた骨を見たこともある。それだけだ」

男はそれ以上語ろうとはせず、再び手風琴を鳴らし始めた。私たちは四つ辻からさらに先へと足を進めた。歩きながら私は手風琴が奏でる曲の題名を思い出した。

『夜の舟』だ。あの老人はハーティムかもしれない」

アクヌスがハーティムとは誰かと訊くので私は応えた。

「あの曲、『夜の舟』を作つた手風琴弾きだ。評判になり一時持て囃されたが、いつの間にか姿を消した。嫉妬した楽師仲間に指を折られたとか、才が枯れて自ら死を選んだとか、女に恨まれて刺されたとか、言われていたと思う。まあ、君が産まれるよりも前の話さ」

手風琴の調べはまだ聞こえていた。振り返ると、デリン灯の青白い灯の回りに灰色じみた影のようなものが幾つか浮かんでいるように見えた。手風琴に混じつて、かすかに提琴や小太鼓の音が聞こえてくるような気がした。

「ここは死者の街というところは別の場所なんだろう。それにグルーアンというのは何だ。そういう名の地下の街が別にあるのか。弟さんの本

当の目的はそこへ行くことなのか。そろそろ教えてくれないだろう」

「知りません。そんな名前聞いたことがありません」

私は多少語気を強めて尋ねたが、アクヌスの答えは素っ気なかった。一度寝ただけでは信用はしないのか、不満が残つたのか。地底の奏楽は時折調子を外しながら、まだわずかに耳に届いていた。

三

地下の街レオネイプは四つ辻を過ぎると次第に灯も見えなくなり、建物も倒壊したものが多くなつた。あの辻のまわりだけが奇跡のように破壊を免れて地底に沈んだのだろうか。世捨て人とは言つても食べ物や水は必要だろう。ヴェネルロック邸の地下室から出入りしているとは思えないので、どこかに別の地上への道があるのだろうか。

壊れた石畳を進んでいくと道は崩れた岩壁に突き当たつた。そこには身をかめれば通れるほどの穴が開いていた。側にはばらばらになつた人間の骨が転がっていた。角燈を近づけると、かなり古いものであるように見えた。

穴の周囲には土砂が幾らかつもり、何者かが出入りを繰り返したようにも見えた。靴跡らしきものもわずかにあるような気もしたが、別の足跡らしきものと入り混じり、はつきりしない。

「さて、今度こそ、死者の街とやらへの入り口かな。それともグルーアンとやらへのか」

アクヌスは何も答えなかつた。私たちは横穴の中に進んだ。背を丸めてしばらく行くと、穴は広がり、どうにか背を伸ばせるほどの広さになつた。進むに連れて妙に生臭い空気が漂い始めた。土や黴のにおいとは異なる何かのにおい。獣臭いとも感じられたし、何か腐つたにおいとも思われた。

ファバーン剣からは痺れにも似た感触が伝わってきた。抜くと古の神秘文字は青みがかった緑色の光を放つていた。角燈の灯に照らし出されているのは、荒く削られた岩壁、そして、ひどく粗雑な普請の柱や梁だつた。

何ものかが作った隧道は曲がりくねって進んでいた。しばらく進むと道は二股に分かれていた。アクヌスは立ち止まり、角燈を岩壁に近づけて丹念に何かを調べていた。

「左です」

彼女が指し示す場所を見ると、掌ほどの大きさの鶴嘴のような印が岩肌に刻まれていた。それがあることを知らなければ見過ごしてしまうような、ささやかな刻印だった。

「ご先祖の残したものかね」

「ええ、そうです」

隧道は幾度か枝分かれを繰り返した。アクヌスはその都度立ち止まり、岩壁の印を探した。

「君を信じるしかないわけだが、大丈夫なんだろうな」

「大丈夫です、多分」

何度か分かれ道を過ぎると、道は少しずつ上っているように感じられた。井戸からの横穴もこの道も上りというのは奇妙に感じられた。アクヌスが選ばなかった道には明らかに下っているところもあった。

幾度目かの分かれ道でアクヌスは短い悲鳴のような声を漏らした。ちょうど道が二股に分かれるところに小振りの鶴嘴が転がっていた。角燈を近づけると、先端には乾いた血らしきものがついており、あたりにも黒ずんだ痕が飛び散っていた。

「ネルアス」

彼女は弟の名前を呟くように口にした。

「弟さんのものかね」

「多分そうです」

「これは誰かと、いや何かと争った痕だ」

「そうですね」

私は彼女の肩が小さく震えているのに気づいた。

左側の道には靴を履いていない足跡と何かを引きずった痕がわずかに残っていた。その足跡は、ヴェネルロック邸の「井戸」のまわりにあったものと似ているような気もした。

「地底で何かと遭遇する危険について、弟さんは話していなかったのかい」
アクヌスは両腕で自分の肩を抱いて、押し殺すような声で言った。

「いいえ、何も」

「いい加減にしてくれ。僕はこんな害で何かの餌になる気はない。君も弟と生きて地上に戻るつもりなんだろう。危険があるなら、話せ」

私は彼女の肩をつかんで揺さぶった。

「何か、何かがいるかもしれない、それしか弟は言ってなかったのよ」

アクヌスは引きつった声でそう答えた。

「何かとは何だ」

「知らないわ。あの手稿ははっきりしない書き方ばかりだって」

私は彼女から手を放した。

「なぜ黙っていた」

「そんな得体の知れないものがあるかもしれないと知れば、断られると思ったのよ。私はネルアスを取り戻したいの」

アクヌスは肩を震わせ、涙を流していたが、眼鏡の中の瞳は私を睨むように見据えていた。

しばらく私たちは黙って立っていた。角燈の芯がわずかな音を立てるのが聞こえた。

「道はこちららしいが」

右側の道の壁に鶴嘴の形の印がついているのに、私は気がついていなかった。そちらの道を指し示すと、アクヌスはすぐには答えなかった。

「秘密の金鉱脈への道かな」

右側の隧道は急な下り坂になっているように見えた。

「違います。左です。弟を助け出さなくては」

「ふむ、そうだね」

私たちは左に道をとって、進んだ。何かを引きずった跡はずっと続いている。

隧道はいったんは狭くなり、また少し広くなり、やがて行く手に灯が見えた。ファバーン文字が先刻よりもはっきりと浮かび上がって見えた。

私はアクヌスに角燈を岩陰に隠すように言った。

隧道の先には岩室が広がっていた。左右の差し渡しは四十イート（約十二メートル）、奥行きはもつとあるようだが、先は闇に溶け込んでいる。

灯は真ん中に置かれた石造りの灯籠から発せられており、その黄色い光に照らされて、無数の棺が壁に並んでいた。何段にもなった壁の棚は岩を彫

り込んで作られたものようで、そこに横向きに棺が置かれている。棺は木製のものもあれば石造りのものもあるようだが、ほとんどは蓋が暴かれています。壊されていた。床に打ち捨てられているものも少なくない。人骨が至るところに散乱していた。床の上、岩棚、棺から半ば引き出されているものもある。いつの時代のものもしれぬこの地下納骨堂では、派手な墓荒らしが行われたのだろうか。

「ここが死者の街なのは間違いないさそうだな」

「ええ」

人骨の他に、灯籠の光を受けてあちらこちらに光るものが見えた。精緻な彫り物の施された銀の腕輪、紅玉と翠玉の嵌め込まれた黄金の首飾り、真珠と螺鈿で飾られた宝剣、そうしたものが無造作に散らばっていた。レオネイブ同様、ここも地震で崩落した箇所があるようだったが、棺の壊れ方はそのためだけとは思えなかった。宝物に興味のない盗掘者とは何者なのか。

答えを得るのに待つ必要はなかった。背後からアクヌスの悲鳴が聞こえた。振り向くと揺れる角燈の灯の中に奇怪な生き物が見えた。それは人間に似ているということもできた。二本足で立ち、二本の腕を持ち、土にまみれた肌は毛がなく青白い。背を丸めているからか、背丈は五イート（約一・五メートル）ほどに見える。だが、手足には黒く長い鉤爪があった。指の数も五本には足りないようだった。細長い顔は犬と人間を合わせたかのように、大きく裂けた口から尖った牙がはみ出し、涎が滴っていた。アクヌスは私の腕に飛び込んできた。

「何かつてのはこのことか」

「多分、きっと」

彼女は震えながらそう言った。

これがネルアスが鶴嘴を振った相手なのだろうか。飛びかかる機をうかがっているのか、怪物はじりじりと近づいてくる。こちらにのぼした鉤爪がわずかに震えているように見えた。

私たちは後ずさり、荒れた納骨堂へと足を踏み入れた。アクヌスは周囲の奇怪な有り様に目をやり、悪い考えを振り払うかのように頭を振った。

怪物は納骨堂に開いた穴の縁に手をやり、肩で息をした。それから、遠吠えのような声を上げた。弱々しく細い声のように聞こえたが、その声は

岩室に俯して大きく広がった。納骨堂のあちこちからうめくように応える声があった。骨を踏む音が聞こえた。

灯籠の光の届かない闇から幾つもの影が立ち上がった。犬のような顔をした鉤爪を持つものがゆっくりと光の輪に近寄ってくる。十、二十、いやもつといるだろうか。最初に遭遇したものの背後にも、幾つか影が動いているようだ。

「この先はどうなっているんだ」

「死者の街を通り抜けて、さらなる深みを目指すよ」

「深みっていうのは」

「知らないわよ、弟はこの先なのよ」

アクヌスは震えながら怪物が蠢く納骨堂の奥を指差した。

私たちの出てきた穴は後から岩壁の裂け目を掘り広げたものに見えた。アクヌスはさらなる深みと言ったが、潰れていなければどこかに地上への通路があるはずだった。だが、灯の届く範囲ではそれらしいものは見当たらない。闇の先にそれはあるのだろうか。

「仕方がない、突っ切るか。角燈をしつかり持って、僕から離れるな。多分、奴らは灯は好きじゃないだろう」

石灯籠の灯は誰が点したのか、その疑問は口には出さないことにした。

私とアクヌスは納骨堂の奥へ向かって走った。怪物たちは私たちを追ってきたが、灯籠と角燈の光の中に入ってくる踏ん切りがつかないようにも見えた。二度三度こちらに向かつてこようとして、後退る姿もあった。存外気弱な生き物なのだろうか。

どうやら彼らは飢えているようだった。肋が浮き出ているものもいるし、犬とも人ともつかぬ声で吠えるがその声はどこか弱々しかった。

私たちは石灯籠に近づき——それは人の背丈よりも大きなものだった——それを越えて奥へ進むと闇が深まり、怪物たちは勢いづいたようだった。ついに一匹——一人と呼ぶべきなのか——が鉤爪をのぼして飛びかかってきた。半イートはある黒い爪が迫る。私はファバーン剣でその爪を薙ぎ払った。青緑の火花とわずかな電光が走った。怪物は折れた爪を抱えて、悲鳴を上げて飛び退った。その声にに応じて、仲間たちがいささか哀れに聞こえる鳴き声をあげた。

「いったい何の騒ぎだ」

突然行く手から人間の声が聞こえた。怪物たちはいつそう騒ぎ立てたが、それはどこか言い訳を申し立てているようにも聞こえた。

納骨堂の奥の闇の中に青白い光が点った。角燈や松明ではない光だ。その光の中から禿頭の人間が現れた。黒衣を身にまとい、奇妙に細長い頭から頼みで青黒い奇怪な文字らしきものが覆っている。骨張った手に振じた木の杖を持ち、その頂きに青白い炎が揺れていた。

怪物たちはその男のまわりに集まり、盛んにうめき、吠えだした。その声は次第に何らかの言葉のように聞こえてきた。

「ふむ、もう少し待つことはできぬのか。寒さが高ければ流行風邪で死ぬ奴も増えるだろうに」

私はその男を知っていた。しばらく前にある娘の行方を捜す一件でかわりあつた死霊術師だ。

「モルクナント、こんなところで何をしているんだ」

妖術使いは私の姿を認め、少しだけ驚いたような顔をした。

「それは私の台詞だ。スナブ・ランケン、お主こそ地の底で何をしている」
「仕事だよ。この連中はあんたの知り合いなのか。とりあえず、僕たちを食べないように言ってほしいんだが」

「食屍鬼は生きた人間は食べない、普段はな。生者を喰らうのはある種の禁忌だ。だが、このところ死人が足りなくてな、飢えている。我慢できなくても仕方あるまい。流行り病か戦でもあると良いのだがな、そちらの女子など、少し腐れば美味かもしれぬからなあ」

モルクナントは悪意のある笑みを浮かべた。アクヌスが私の肩にびつたりと身を寄せた。

「その前にあんたを奴らの餌にするよ」

「生憎、私はこの呪文で守られている。お主もその魔剣を持っていけば簡単に食われることはあるまい。やはり、その女子か」

頭の呪文を指先でつつきながら、死霊術師は陰気な笑みを浮かべた。

すると黒衣の男の後ろからもう一つ別の人影が現れた。灯の輪の中に入るとその人影は眩しうに青白い光を放つ目を瞬かせた。それは周囲に蠢く食屍鬼と同じ生き物だった。ほっそりとした姿に小振りな乳房があり、女なのだろう。犬に似た顔立ちも心なしか整っているようにも見えたり、少しだけ小さな口から鋭い牙が飛び出しているのは他の食屍鬼と変わ

らなかった。

女の食屍鬼は黒い鉤爪で角燈を指差し、短い言葉らしきものを口にしながら「角燈が眩しいから下げると言っている」

「食屍鬼は言葉を話すのか」

女の食屍鬼がまた短い言葉らしきものを発した。取り囲んだ他の食屍鬼たちが、唸り声をあげ、同様の言葉らしきものが重なる。

「聞いての通りだ。おとなしく言うことを聞いた方が身のためだ。この者はディジャラグ、彼らの女王に当たる者だ。ここで諍いを起せば私も押さえられないぞ」

アクヌスは角燈の炎を絞り、足下に置いた。食屍鬼の女王は尊大にうなずき、モルクナントの前に出た。首から下がる小さな骨や歯をつなげた飾りが女王の証なのだろうか。

ディジャラグは尖った歯を見せながら、また幾つかの言葉をつなげて何事かを語った。ウォモレン（共通語）で書き表すのは困難な怪異な発音だったが、モルクナントは自らもその言葉を操り、食屍鬼の女王と会話を交わした。

「お主たちは何をしに来た。ついこの前もお主たちのような成りをした若造が引きずられてきて、もう少しで食われるところだったが、彼女が止めた。グルーアンに行きたいなどと言うので好きにさせたが、お主たちもその口か」

「それは私の弟に違いありません。私たちは弟の行方を捜しているのです」

死霊術師はディジャラグにその話を伝えたようだった。食屍鬼は眉をひそめるような面持ちになり、聞き取れない言葉を発した。

「諦めろと言っている。グルーアンに向かって戻った者はいない」

ディジャラグは鼻をひくひくと動かして妙に人間くさく首を横に振った。

「またグルーアンか。レオネイプの手風琴弾きも同じ名を口にした。いったい何のことだ」

モルクナントは呆れたような顔で私とアクヌスの顔を交互に見た。

「お主たちはグルーアンが何かも知らずにこの地底を彷徨っているのか」
死霊術師はまた食屍鬼の女王と幾らか言葉を交わした。

「彼女はお主たちを哀れな虚け者だと言っている。おとなしく死んで墓に入れば、きれいに食べてやるのにとな」

「死んだら餌にしてもらっても何でもいいが、グルーアンというのは何だ」
モルクナントとディジャラーグは今度は幾らか声を潜めるように何事か話しあった。一二度、食屍鬼の女王はアクヌスの方に視線を送り、それから私の剣を指差した。

「グルーアンは食屍鬼の伝説でささやかれる地底の都だ。もちろんレオネイプのようなささやかなものではない。いつの時代のものかは定かでないが、〈大いなる厄災〉よりも古いのかもしれない。かつては地上にあったものが、度重なる天変地異か、あるいは〈厄災〉によって地下深く沈んだという話もあり、地上の厄災から逃れるために最初から地底に築かれた街だという話もある」

私はアクヌスの顔を見たが、彼女は黙って首を横に振った。

「そこに何がある。あなたは行ったことがあるのか」

「知る限り、そこへ行って戻って来た者はいない。食屍鬼たちの言い伝えと極くわずかな古い粘土板の記録、それに幾つかの偽書に記載があるだけだ。この納骨堂は相当地に古いものでな、何か残っていないかと調べてみたが、どうやら何もなさそうだ。食屍鬼たちの話によると、グルーアンには彼らの神がいるらしい。彼らはその神の末裔だとも、その神に作られたとも言う。それ以上のことは地の底の闇の中だ」

「弟はそこへ行ったのですか。そこへたどりつく道があるのですね」

アクヌスの問いに死霊術師はうなずいた。

「道はある。と言っても誰も先を確かめたわけではないから、食屍鬼たちの間にグルーアンへの道と伝わっているということだがな」

「ならば、そこへ案内してください。私は弟を取り戻したいのです」

アクヌスは真剣な面持ちのように見えたが、モルクナントはかすかな冷笑を呪文の書かれた顔に浮かべた。

「あの若者は間違った情熱に駆られている。秘密の黄金だの幻の金脈だのを探索するならまだしも、グルーアンに行きたいとはな。先祖が何か書き残したとか言っておったが、大方『地底宮秘記』あたりの記述を真に受けたのだろう。納骨堂の宝物なら土産に持たせてやったものを」

「もし、先祖の記したことが間違いならば、なおさら弟を連れ戻さなければ

ばなりません。お願いです、そのグルーアンへの道を教えてください」

死霊術師はいささか困惑した顔で食屍鬼の女王と会話をかわした。

ディジャラーグはまたファバーン剣を指差し、眉間にしわを寄せた。
「彼女はお主のその剣に危惧を抱いている。それを振るうことで何か良くないことが起こるかもしれないとな。お主はその剣で数多の怪異を打ち払ってきたかもしれないが、地の底では違うことが起こるかもしれない」
「よくわからない話だ」

「そうだな、私にもわからない。だが、地底の住人がそう感じるのだ。心しておいた方がよからう」

モルクナントとディジャラーグについて、私たちは納骨堂の奥へと進んだ。死霊術師の杖から発せられる青白い光で見えるのは、壊れた棺とばらばらになった骸骨だったが、やがて左側の岩壁が大きく裂けているところへ出た。幅は三メートル、高さは十メートルはあるだろうか。不規則な岩の裂け目のまわりには後から加えられたらしい線刻や黒ずんだ絵模様が見て取れた。

「ここがグルーアンへの入り口と伝わる場所だ。食屍鬼たちはここから先へは入って行かない。私は一度入ってみたことがあるが、好奇心に打ち勝って戻ってきた」

「何があるんだ」

「穴だ」

ディジャラーグは壁の裂け目に向かって、頭を垂れて何事かつぶやき、それ以上進むうとはしなかった。モルクナントと私たちは裂け目に足を踏み入れた。

四

裂け目の中は不規則な形の隧道だった。人——あるいは食屍鬼——が作ったものではなく、地震か何かでできたものようだった。一際狭い岩の亀裂を潜り抜けると、岩室に出た。そこは明らかに人間が作ったもので、半ば岩と土に埋もれてはいるものの、石を切り出した平らな壁に装飾のない円柱が並んでいた。差し渡しは二十メートル（約六メートル）ほどだった

が、崩壊した土砂で覆われた部分の向こうにはもっと広い空間が広がっているようだった。

ところどころ崩れた円天井の下、不規則な角張った窪みが何段かあり、その真ん中に七角形の穴が開いていた。七イートばかりの大ききさだろうか。

「これがブルーアンへの入り口なのか」

「そう伝わっている」

穴をのぞいてみたが、階段があるわけでもなく、綱が下がっているわけでもなかった。滑らかな石の壁が続いており、その下は漆黒の闇だった。

「ここをどうやって降りると言うんだ」

モルクナントは瓦礫の中から小石を拾い上げると、穴へ投げ入れた。奇妙なことが起こった。小石は落ちなかった。穴の壁がぼんやりと濁った薄黄色に光り、石は水面に落葉が浮かぶように宙に浮いていた。

「何だこれは」

私はフアバーン剣の柄を握ったが、痺れるような感触はわずかだった。

「魔術なのか」

「よくわからん。浮身の魔術の一種なのか、あるいは別の何か——（大いなる厄災）以前の——の力なのかもしれない。まだ先がある。よく見ていろ」

穴の縁あたりに浮かんだ小石はしばらく静かに揺れていたが、やがてゆっくりと穴の中に沈み始めた。石の沈降に合わせて薄黄色の光も穴の奥へと動いていく。それは次第に速さを増し、ぼんやりとした七角形の光とともに闇の中に埋もれて見えなくなった。石が何かに当たる音は聞こえてはこなかった。

「弟はこの穴から降りて行ったのですね」

「そうだ。私は一応止めたが、あの若者は穴に飛び込み、ゆっくりと沈んでいった。それきり、浮かんでほこない」

「人間で試し済みということか」

「そうだ」

「あんたは試す気はないのか。ブルーアンについて調べているんだろう」

死霊術師は青白い光の中で醒めた笑いを浮かべた

「あの若者かお主たちが無事戻ってきたら、試してみるとしよう。私はこ

う見えても実利を取る人間なんぞな」

「ああ、そうだろうね」

アクヌスは穴の縁に立ち、じつと中を見つめていた。それから足下の小石を取り、穴に投げ入れた。石は先ほどのものと同じように一度浮かび、ゆっくりと沈んでいった。

「私は行きます」

そう言うと彼女は穴の中に足を踏み入れた。短い悲鳴が聞こえ、アクヌスの姿は穴の中に消えた。

「馬鹿な」

私は穴の縁に手を掛け、闇の中に彼女の姿を探した。すると、濁った薄黄色の光が点り、女の姿を照らし出した。

「不思議です。水に浮いているような感じがする」

肩のあたりまで穴の縁から見えている様子は、奇妙な泉にでも浸かっているかのようだった。金茶の髪や服の裾もまた水の中にあるかのようになり、半ば浮き上がってゆらゆらと揺れている。

「あなたも来るのでしょうか」

アクヌスはそう言う私の顔を見上げた。六角形の眼鏡の中の鳶色の目は、笑っているようにも見えた。彼女の身体はゆっくりと沈み始めた。「やれやれ、僕も実利を取りたい口なんだがな」

後ろでモルクナントが小さく笑った。

「お主には無理だな。土産話を楽しみをしているぞ」

私は七角形の穴の中にそっと足を置いた。奇妙な力を靴底に感じた。思いきつてもう片方の足を踏み出すと、一気に体が沈んだ。アクヌスよりもいったん私の体は下になったが、何らかの力がもう一度体を押し上げた。私たちはほぼ同じ高さ穴の中で浮いていた。七角形の縁で死霊術師がにやにやと笑って骨張った手を振った。私たちはゆっくりと穴の中を沈み出した。

周囲の壁は私たちが沈んでいくのに合わせて薄黄色の光を放った。それは石ではなく半ば透き通った硝子のようなものでできているようにも見えた。アマアッサの薔薇色の館が思い出された。沼地の女占い師の館も木とも硝子ともつかない奇妙なもので作られていた。

沈んでいく速さは次第に増していくように感じられた。この奇怪な穴

の底に打ちつけられるという恐怖が沸き起こった。だが、穴の壁には手掛かりになるような突起も足場もなかった。私とアクヌスはどちらからともなく互いの手を取った。

いったいどれほどの間落ちているのか、よくわからない。そもそもヴェネルロック邸の地下室から地底に入り込んでどれほどの時がたっているのだろうか。奇妙なことに私もアクヌスも空腹感がなく、少しの水を飲んだだけでここまで来ていた。手風琴弾きが言うように陽光の差さない地の底では時の流れは意味を持たなくなるのだろうか。

落ちる速さはさらに増し、アクヌスの長い髪や私の外套が上を向いて揺れ動いた。地の底に叩きつけられる恐怖に私たちは固く手を握りあつた。薄黄色の灯は私たちの落ちる速さについていけないようで、頭上で明滅している。

やがて、ありがたいことに心持ち落下の速さが緩んできた。灯は私たちのまわりを照らすようになり、服の裾も髪も上を向くのをやめた。穴に入った時と同じくらの速さで私たちはさらに下へと落ちていった。

落ちるにつれ、周囲の光は幾らか緑がかつた色合いに変わった。穴の壁の薄黄色の灯の他に斑に光る灰色じみた薄緑の光が加わつたのだ。速さが減じるにつれ、それは黄ばんだ灰緑色に光る苔のようなものが、壁に生えているせいだということがわかった。

落下は非常に緩やかになり、不意に周囲の壁が広がった。ずっと感じていた下からの力が止むと半イートばかり落ちた感触があり、靴底が固い床についた。

そこは穴の入り口と同様の岩室のようだった。穴の壁と同様の光が近くに立つ円柱から発せられていた。灰緑の光る苔も周囲に広がっており、当たりの様子を見てとることができた。入り口よりもずっと原形を留めているようで、滑らかな石柱が並ぶ通路が土砂に埋もれず目の前にのびていた。私たちは七角形の低い壇の上に立っており、頭上には丸い天井に七角形の穴が開いているのが見えた。

私たちは通路を進んだ。穴と同様、円柱の薄黄色の光は私たちが進むにつれて次の円柱へと移っていく。デリン灯の一種なのかもしれないが、色合いは異なっている。

少し進むと前方に三角形の光が見えた。どうやらそれは壁に設けられ

た大きな円形の扉で、左右に開く引き戸がひどく傾いているのか、あるいは斜めに開くのが途中で止まってしまっているようにも見えた。

扉が作る縦長の三角形の向こうから、灰色じみた薄緑や黄色の光が漏れていた。こちらの通路よりはかなり明るいように見えた。

「この向こうがグルーアンとやらなのか」

「かもしれない」

アクヌスは落下の恐怖から立ち直り、また元の落ち着いた態度に戻っていた。

円形の扉が三角に口を開けたところを潜り抜けた。そこには地底の湖が広がっていた。黒々とした水面に波はなく、周囲の仄かな光を鏡のように映している。岸辺の灰色がかつた緑や黄色の苔は湖を覆う巨大な岩の天井にも広がっていたが、光を放っているのはそれだけではなかった。宝石の鉱脈が走っているのか、そこには青や紫、赤や緑の小さな光がきらめいており、まるで地底の星空のような不思議な情景を作り出していた。天を横切るように金銀の淡い帯も見えるが、それが手付かずの鉱脈だとしても、掘り出すのは至難の業だろう。

大岩窟はどれほどの広さなのか、わかりにくいだが、対岸までは三千メートル（約九百メートル）はあるように思われた。高さも少なくともその半分はあるようだった。

向こう岸には黄色や薄青の光が幾つも連なって見えた。岩場なのか建物なのか入り組んだ陰影が重なっており、街明かりのようにも感じられた。だが、差し当たって一番私たちを驚かせたのは、巨大な茸だった。湖を覆う大岩窟の縁に沿うように生えているそれは人の背丈よりも大きかった。最も巨大なものは八イート近くあるだろうか。黄白色や青みがかつた白の柄の上に大きな傘が広がっており、色も形も様々だが、どれもぼんやりとした光を放っている。小振りなものでも膝近くまでの高さがあった。

「きれいだな」

アクヌスが独り言のように言った。

「ああ、そうだな」

確かにそれは美しいと言える光景だった。光る巨大な茸の群れ、星のように光る岩天井、それを映す黒い鏡の水面、それは地上では決して目にす

ることのできない景色だった。

「足跡、足跡よ」

アクヌスが叫んだ。彼女の指し示す目の細かい砂利のような地面には、確かに靴の跡らしきものが見て取れた。足跡は湖の方に続いており、たとえと岸辺で迷ったような跡があつたが、さらに湖の縁を右手に進んでいた。後を追っていくと、湖面に何か筋のようなものが見えてきた。最初、それは水面に細長い岩場が連なっているように見えた。だが、近づくとそれは橋であることがわかった。

白っぽい石を細長い方形に切り出したものを幾つもつなげてある。欄干らしきものはなく、ただ湖面から突き出した橋杭の上に桁を渡し、その上に石板を連ねた作りだった。

ネルアスのものと思われる足跡はその橋の袂へ続いていった。橋の先の方は闇に包まれてよく見えないが、対岸の街らしきところへ続いているのだろうか。

「本当に行ったんだわ」

アクヌスは橋の袂に立ち、対岸を見つめた。

私たちは橋を渡った。幅は三メートル（約九十センチ）ほど、ざらついた白い石はそれ自体がほのかに光を放っているようだ。左右の黒い水面には波一つなく、岩の天蓋にきらめく小さな光が映っている。進むにつれて次第に星空の只中に掛けられた橋を歩んでいるような感覚に襲われた。

橋は緩やかな上り坂になっていた。どれほど歩いたのか、やがて行く手に青白い光がぼんやりと見えてきた。近づくとそれは灯の点つた小さな東屋のように見えた。

橋の幅は次第に広くなり、東屋に到達した。差し渡し、高さ、ともに十メートルほどの建物で平面は不規則な七角形をしているようだった。細い柱に低い腰板が張っており、それらは半ば透き通った硝子とも石ともつかないものでできていた。橋板同様、淡い光を放っているが、色合いがやや青白く見えた。

細い角柱の上には七角形の笠状の屋根が乗っている。それもまた薄い硝子板のようなものでできていたが、私たちがその下に入り、見上げると変化が現れた。東屋から蒼白い光が消えて、屋根の内側に岩屋の天井の淡い光がはつきりと透けて見えるようになったかに思われた。だが、そうで

はなかった。東屋の屋根の内に見えているものは、見慣れたサンジェリーの星空だった。銀河がぼんやりと光の帯を作り、イヴァーナ座の八つの星や赤いヘザリアの星が見えた。

屋根の端から頭を出して上を見たが、そこに見えるのは変わらないうる蓋だけだった。今一度屋根の裏側を見てみたが、星空は描かれたものとも思えなかった。どのような仕組み、あるいは魔術なのか、わかるはずもないが、地底の住人はこの場所で地上の夜空に思いを馳せるのだろうか。ふと私はヴェネルロック邸の寝台の天蓋を思い出した。

東屋の中には小振りの長椅子があつた。私とアクヌスはそこに座り、休息を取った。持ってきた水を飲み、麴と乾酪と干肉を齧った。疲れているはずだが眠気は襲ってこなかった。手風琴弾きの老人が言ったように、日の差さない地底では時の流れは無意味になるのだろうか。空気はひんやりとして風はなかった。屋根の内の夜空では星が瞬き、屋根の外の岩窟には動かぬ小さな光が広がっていた。

東屋の先にはさらに橋が続いていた。橋は徐々に下っているようだった。ここが橋の真ん中なのだろう。

東屋からは対岸の様子がある程度はつきり見て取れた。淡い黄色や薄青の光で照らされたもの、それは明らかに街だった。三階建てかそれ以上ある複雑に入り組んだ建物が湖の向こうに建ち並んでいる。無数の柱の間にたくさん露台が突き出しており、淡い色合いの光がそこかしこに見えた。

「本当にあったのね」

アクヌスがつぶやいた。

「君はグルーアンのことを弟さんから聞いていたんだろう」

アクヌスはうなずいた。

「なぜ、黙っていた」

彼女は喉の奥からくぐもった笑いを漏らした。

「そんな話、信じていなかったからです。隠された黄金や秘密の脈脈の話は少しは信じたいという気持ちもありましたが、地の底深くに街があるなどという話は到底真実とは思えませんでした。弟は近頃は地下の書齋にこもりきりで、ほとんど私と話をしませんでした。私が弟の話をまともに取り合わなかったからでしょう。私は弟を愛していますが、同時に恥じて

もいたのです。馬鹿げた妄想に囚われた年若い隠遁者、それはヴェネルロック家の人間として相応しい姿ではないと思えたのです」

ヴェネルロック家に相応しい人間とはどのような人間なのか私には計り兼ねたが、それを彼女に尋ねるのはやめておいた。

「弟さんは先祖の黄金と秘密の鉞脈でヴェネルロック家を再興するつもりじゃなかったのか」

「そういうことを口にしてはいましたが、たとえそういうものが本当にあったとしても、あの子にそんなことができる気概があるとは思えません。それに、そういうことにしておいた方が、あなたも引き受けてくれると思つたのです」

「一族の再興は君がやればいいんじゃないか」

アクヌスは今度は声を出して笑つた。

「私にもそんな気概はありません。古い屋敷とともに朽ち果てていく、それで十分です。ネルアスさえ戻ればそれでいいのです」

ヴェネルロック家に相応しい人間というのがどういふものなのか、やはり私にはわからなかった。

五

私たちは東屋を出て、グルーアンと思しき地底の都に向かって進んだ。近づくにつれて、灯は点つてはいるものの、そこが廃虚であることがわかつてきた。柱はそこかしこで折れ、傾いでいた。露台や壁もまたあちこちで崩れ落ちていた。巨大な茸や光る苔で覆われている部分も見受けられた。動くものの姿はなく、何の物音も聞こえなかった。

橋を渡りきり、私たちは細かな砂利の浜辺に立った。橋の袂にはかつては門のようなものがあつたらしいが、今は半ば岸辺に埋もれた瓦礫になつていた。湖から建物まではわずかで、橋板と同じような白い石が敷かれた道があつた。

間近で見る建物は巨大な宮殿のようだった。大半は石造りのようだが、硝子か水晶のような半透明のものもところどころで使われている。大小の柱の間に床板を張り巡らしたような作りで、壊れてしまったのか、最初

からなかったのか、壁がはつきり見える部分は少ない。

倒壊は至るところで見受けられ、三階あたりまで崩れて瓦礫の山と化しているところや、上から岩板が崩落したのか、巨大な岩に押し潰されていくところもあつた。

建物は何層にもなつて複雑に入り組み、一つの巨大な建物なのか、幾つもの建物がつながっているのか、判然としなかった。灯と見えたものの大半は光る茸と苔、黴のようだったが、ところどころに角燈や提灯らしきものがデリン灯のような冷たい光を放っている。だが、間近で見ても動くものの姿はなかった。

橋からの道は建物の間の拱門につながっていた。弧を描く上部の白い石には何か文字らしきものが彫られていたが、判読はできなかった。迫持を潜り、薄暗い小道をしばらく行くと、広い道らしきところに出た。幅は四十メートル（約十二メートル）はあるうか、真ん中に細い川が流れている。川縁は石組みだが、あちらこちらで崩れて、水の中に傾いだ切石が転がっていた。

道の左右には湖側から見たのと同様の建物が連なっていた。手前側は湖畔の建造物の反対側であり、道と川を挟んで同様の大きな建物が並んでいる。柱と露台、それに大小の拱門が幾重にも重なりあい、複雑な凹凸を作り出している。茸や苔の光、それに人工の灯が深い陰影を描き、地底の都に荘厳な美を与えていた。

道は川の流れに沿って湖に対して斜めに走っており、左は湖の方へ、右は大岩窟のより奥へと続いていた。街には人影はなかった。小さな川が崩れた石組みの間を流れるわずか水音だけが耳に届いた。

私たちは川沿いの道を右手へと進んだ。崩壊の痕は至るところに見られ、瓦礫の山が半ば道を塞いでいる場所もあつた。私たちは川の上に転がる石伝いに対岸に渡るなどして、足を進めた。

左右の建物の一階部分には、かつては商店であつたかのように見える場所もあつた。歪んだ窓枠の向こうに見える傾いだ棚は、店先の陳列棚のようにも見える。柱から突き出した装飾付きの金具には人目をひく看板が下がっていたのかもしれない。光る苔の下にうつすらと見える大きな文字は店の名を記したもののようにも見える。

手風琴弾きの街と同様、ここもまた大地震で地の底に沈んだ街なのだろう

うか。だが、あの奇妙な穴の落下を経て到達したということは、相応の深さに位置していると考えられる。これだけの規模の建物がほぼ原形を留めたまま、地底に沈むということがあり得るのだろうか。

川と道、左右の建物は続いていた。道は緩やかに蛇行しながらやや左手に曲がり、巨大な岩室のさらに奥へと続いていた。天井に見える光は次第に近くなっていくようだった。建物の高い部分——四五階ほどの高さだろうか——が天井の岩板に届いているように見える場所もあった。道もわずかに上り坂になっていくように感じられた。

やがて左右の建物に変化が現れた。倒れた柱や崩れた壁を補修したらしき痕が見え始めたのだ。明らかに別の柱を継ぎ足した部分や意匠の異なる装飾が施された石板で壁の穴を塞いでいる部分が見て取れた。崩れそうな露台を有り合わせの石柱で支えている場所も見受けられた。

誰かが——あるいは何かが——この地底の都市を崩壊から守ろうとしているのだ。そう考えると寂寞とした死の街に生の気配が漂い始めるように感じられた。

「あっ」
アクヌスが突然小さく叫んだ。

「今、何かが動きました」

「確かか」

「ええ、その左手の大きな柱のあたりです」

私たちは油を節するためにはばらく角燈の火を落としていた。再び灯を点し、アクヌスが何かを見たという柱に近づいた。動くものはいなかったが、わずかに足下の土が乱されたような痕があった。剣の神秘文字は穴を落下する時からずっと、曖昧な光を発したままだった。

「あっ」

またアクヌスが声を出した。今度は私の視界にも入った。川縁の切石の影に何か素早く身を隠したのだ。角燈を掲げて走り寄ると、水音がした。人影のようなものが川面を飛ぶように走り、対岸の瓦礫の後ろに回り込んだ。

「食屍鬼でしょうか」

「納骨堂とは違う一族かもしれない。いや、こんなところでは食べ物にありつけないか」

小さな足音がして、向こう岸を黒い人影が動いた。川上の方へとそれは走り、転がっている柱の影に身を潜める。黒い頭と思しき部分が柱から顔を出した。こちらの様子をうかがっている。はつきりとは見えないが食屍鬼のような青白い姿ではないようだ。

私たちは対岸を慎重に進んだ。向こう岸の黒い影は間合いが詰まると、また走って次の物陰へと移動した。幾度か同じことを繰り返している内に、周囲が次第に明るくなってきたことに気づいた。苔や茸ではない、青白い灯が左右の街並に増えていた。川縁には傾いた街灯らしきものがあるところどころにあり、光る二イートばかりの角柱が先端で明滅していた。色合いや意匠は違うが、それは地上のサンジェリイを照らす古の遺物と明らかに同種のものであった。

建物の補修もまた、よりはっきりとわかるようになった。石柱で補強された建物の入り口に石の台のようなものが置かれ、その上に石塊——浅浮き彫りや彫像の欠けらしきもの——が並べられている様は、あたかも店先の真似事のようなだった。ひび割れ、色褪せた看板の残骸らしきものを幾つも並べた場所もあった。

次第に黒い影を追っているのか、導かれているのか、わからなくなった。影は私たちを警戒してはいるが、離れるつもりはないようで、襲いかかるうとする様子もなかった。アクヌスがたまりかねたように影に問いかけた。

「あなたは誰なの。私は弟を、ネルアスという弟を捜しているの。まだ若い男よ。ここに来る人間なんて、ほとんどいないはず。知っているなら教えて」

アクヌスは川の幅の狭まったところを飛び越えていきそうな勢いだった。私は彼女の腕を取って、引きとどめた。

「ねえ、何とか言ってみようかい」

彼女の声に気圧されたのかどうか、少し先の石塊の影から顔を出した。それは食屍鬼ではなかった。丸い頭には髪はなく、黒い艶のある肌は銀色の星屑を散らしたような小さな斑がある。目にあたる部分には幾分吊り上がった銀色に光るそれらしいものが見て取れるが、鼻や口、耳はわずかな滑らかな高まりがあるだけだった。

「ネ……ル……アス」

それは口を開いたわけではなかったが、そう聞こえる声らしきものを発した。

「知っているの、ネルアスを。どこに、どこにいるの。弟は無事なの」

黒い生き物はもう一度、不鮮明ながら彼女の弟の名前を発した。そして、また地下都市の奥の方へと進み始めた。

「あれは何なのですか」

「わからない。食屍鬼よりはましな何かだろう」

黒い生き物はこれ以上姿を隠す必要はないと判断したのか、少し先の対岸を早足に進んでいった。人間とほぼ同様の体つきをしていたが、手足の動きは奇妙なほど滑らかで、その艶のある黒い肌の下に骨があるのか、疑問を感じるほどだった。

岩窟の天井はさらに高さを減じ、道は時折階段状になって上っていた。巨大な地下の空洞はその端に近づいているのだろうか。

先を行く黒い生き物にばかり気を取られていたが、気がつくともわりの建物にも何者かが蠢く気配が感じられた。視界の隅の何かに気づき、視線を奇妙な「店先」に転じると、そこにはさらに奇妙な光景があった。

先を行くものとは別の黒い生き物の姿が「店先」にあった。それはまるで売り子のように台に置かれた「売り物」——壊れた彫刻の欠けらや錆に覆われた腕輪のようなもの——の位置をなおしたり、まるでそこに客がいるかのように手招きをしたり、両手を広げたりしていた。この奇怪な無言劇は独り芝居ではなかった。どこから現れたのか、別の黒い生き物が「店先」に近づき、並べられた品々を黒い指でつまみ上げて確かめるような仕事をしたり、売り子と会話を交わすかのような動きを繰り返した。

買い手は納得したかのようにうなずくと黒い手に持っていたものを売り子に渡した。どうやらそれは小石のようだった。すると売り子は買い手が確かめていた錆びた腕輪らしきものを恭しく手渡した。買い手は満足したように闇の中に姿を消した。売り手はまた品物を動かしたり、客を招くような仕事を始めた。

「これは何なの」

アクヌスも私も思わず足を止めて、黒い生き物の奇妙な振る舞いに見入っていた。長らく世界を彷徨い、サンジェリイに還ってからも様々な怪異と遭遇してきたが、これほど異様なものは見たことがなかった。

「ネ……ルアス」

最初に遭った黒い生き物が私たちの注意を惹くようにまた声をあげた。「とりあえず、ついていくしかなさそうだ」

私は彼女の問いには首を横に振って答え、そう言った。

六

道幅は狭くなり、小川の流れははつきりと水音が聞こえるほどに速くなった。黒い生き物は私たちがついてくるのを確かめるように時折立ち止まり、振り返った。

やがて道は緩やかな石段となった。小川はその中央を何段もの滝状になって流れている。左右の建物は背も低く小振りになったが、石柱やとび出した露台に施された装飾はより細やかで美しいと言えるものになっていった。そこにはこの地底にない様々なものの形があった。咲き乱れる花々、生い茂る植物、鳥や蝶、野牛や馬、狼らしき獣、そして戯れ踊る男女の姿、そうしたものが浅浮き彫りや石像となって、石段の周囲の建物を飾っていた。

階段を上りきると、そこは開けた場所となっていた。中央には差し渡し二十メートル（約六メートル）ばかりの丸い池があり、川はそこから流れ出していた。池の真ん中では水面が泡立っており、そこから水が沸き出しているようだった。池のまわりは低い石段で囲まれ、そこには無数の地上の生き物——虫に鳥に魚に獣——の姿が彫り込まれていた。

広場は奥に行くにつれて幅の狭くなる楕円形をしているようで、周囲は岩壁を直接彫って作られたのか、石柱と彫像に左右にのびる梁状のものが複雑に絡み合っていた。あちらこちらに拱門や岩の裂け目が黒い口を開けていて、その奥にはさらに部屋か隧道があるようだった。岩窟の天井は細長い円屋根状になり、どうやらここが湖から続く大岩窟の終端のようだった。

広場の奥には背丈ほどもある水晶と思しき透き通った六角柱が四方に向けて林立していたが、その中央部は大きく破壊されており、大小の水晶柱と崩れた岩が瓦礫の山を作っていた。

そこに奇妙なものが鎮座していた。巨大な円錐状のものが傾いでこちらに突き出しており、その後ろには円錐と同じ太さの大きな円筒がつながっていた。円筒は岩の中に埋もれており、まるで岩窟の壁をつらぬいてこちらに飛び出してきたかのようなだった。太さは二十メートル（約六メートル）以上あるようで、円錐部の長さはその倍近くあるように見えた。

円錐には螺旋状の溝と山が刻まれており、巨大な螺子さながらだった。螺旋の溝の部分には土砂がこびりついていて、山の部分には銀色の輝きが残っていた。その後ろの円筒には帯状の鉄板の連なりが何本か走っていた。本体も黒ずんだ鉄のようなものでできているようで、あちこちに大きな鋸が打たれていた。

この奇妙なものの中には瓦礫を組み合わせて作られた水晶と石の玉座のようなものがあり、そこに一人の細身の若い男が座っていた。黄灰色の上下に茶色い長沓、金茶の髪と瞳、幾分青白い無髯の肌、顔立ちもアクヌスに良く似ていた。

若者のまわりには何体かの黒い生き物が佇んでおり、私たちを導いてきたものも、その中に加わった。黒い生き物たちはまるで人間のように顔を寄せあい、何事かささやきあうような仕草を見せたが、それが本当の言葉なのかどうかすらわからなかった。

「ネルアス」

アクヌスが弟の名を叫んで駆け寄った。若者はぼんやりとした様子で椅子に寄りかかるように立ち上がった。

「ねえ……さん」

ネルアスの言葉は黒い生き物が発するものとどこか似ているように思えた。

アクヌスは弟を抱きしめて、幾度も接吻した。ネルアスはされるがままに体を揺さぶられているようだった。

「ネルアス、ネルアス、心配したのよ。ああ、良かった、生きていて。あなたを失ったら、私、どうしていいか」

アクヌスはそう言いながら、接吻を繰り返したが、その様は姉弟の再会というよりは恋人の無事に喜ぶ女のようにも見えた。ネルアスはまともな言葉も返さず、姉の熱烈な愛情に戸惑っているようにも思えた。

やがてアクヌスも弟の様子に気付いた。

「ネルアス、どこか具合が悪いの。怪我でもしているの。ネルアス、私からわからないの。あなたの姉のアクヌスよ」

ネルアスの肩に手をかけて彼女は不安気にそう言った。

「姉さん、本当の姉さんだね」

弟は奇妙な台詞を口にした。その意味はすぐにわかった。二人の側にいた黒いものが音もなく姉弟に近づいた。黒い肌の中の銀色の欠けらが光を増し、生き物はゆっくりと姿を変えた。胸や尻が膨らみ、顔の造作がはっきりとした。頭には蚯蚓が絡まったような凹凸が現れ、それが背中まで延びていった。黒い滑る肌は色を薄くして黄色みを帯びた乳色になった。

黒い生き物はアクヌスとそっくりの裸の女の姿となった。それはネルアスに身を寄せ、無表情に女の方を見た。

アクヌスは短い悲鳴をあげて、弟とその生き物から離れた。

「これは何、何なの」

アクヌスに似た生き物は姉が弟から離れると、若者の首に腕をからませ、その頬に接吻した。見た目はそっくりだったが、滑らか過ぎる腕の動きは黒い生き物と変わらなかった。

「僕を助けてくれたんだ。この街にたどり着いた時、僕は落石で怪我をしていた。道で倒れてこのまま死ぬのかと思っていると、黒い生き物が現れ、傷を治してくれた」

「治すって、薬でも持っているのか」

私の問いにネルアスは初めて気づいたかのようにこちらを見た。アクヌスが少しだけためらいがちに私を紹介した。

「こちらはスナブ・ランケンさん。探偵よ。あなたを捜し出すことをお願いしたの」

ネルアスは幾分の疑念を宿した目で私を見た。だいぶ、頭が回るようになってきたのだろう。

「黒い生き物は傷口に肌をくっつけて、僕を包むように抱いてくれた。痛みが引いて僕は眠った。目覚めると傷はほとんど治っていて、目の前には姉さんの姿があったんだ」

もう一人のアクヌスはネルアスの体を愛撫するように首に回した腕を蠢かし、襟元から手を入れて胸をまさぐった。

「僕は死んであの世にいるのかと思ったけれど、そうではなかった。ここは地底の都グルーアンだ。姉さんはまるで信じなかったけれど、本当にあったんだ。どうだい、僕は正気だとこれでわかっただろう」

ネルアスはいささか自慢気に笑みを浮かべた。アクヌスは青ざめた顔で小さくうなずいた。

「わかったわ、きつとあなたは正気なんでしょう。でも、それは何、その化け物は」

「この生き物たちは彼らの言葉によればサルドゥゥプスというらしいんだ」

そんな名前の生き物に心当たりはなかった。アクヌスの顔を見たが、彼女の頭は生き物の正体よりも弟にまわりつくそれへの嫌悪でいっぱいだった。

「それはいったい何だ」

「サルドゥゥプスはグルーアンの住人たちの『僕』だと思う。その昔、(大いなる厄災)よりも昔、人間は新しい生き物を作り出す秘術を知っていた。先祖の残した書物や巻物にそれらしい記述がある」

「ふむ、まあ、そういう話は知ってはいるが」

「どんな秘術かは想像もつかないけれど、サルドゥゥプスはこの地底の都で人々が暮らすために作り出された生き物だと思う」

私は別の疑問を彼に投げ掛けた。

「この街は何のために作られたんだ。レオネイブのように地震で沈んだにしては、深すぎるし大きすぎるように思える。誰が何のために地底に都を築いたんだ」

「レオネイブで手風琴弾きに会ったかい」

私は会ったと答えた。

「あの街は地上に居場所のない人間、地上を忌み嫌う人間の隠棲の場になっている。僕はこのグルーアンもそうじゃないかと思っている。戦乱や迫害、災厄——(大いなる厄災)かもしれない——を避けて、地底に一種の仙境を作ろうとしたんじゃないかって思うんだよ」

「ふむ、ここが仙境か」

私は改めて周囲を見回し、この場所の本来の姿、どれほど過去のことかはわからない建設された当初の姿を思い浮かべようとした。泉のまわり

には人々が集いさざめき、川沿いの店先には『本物』の商品が並び、売りの声で賑わっていたのだろうか。

「もちろん、本当のところはわからない。サルドゥゥプスもいつ誰が何のためにこの街を作ったのかは知らない。地下の書齋にこもるのが好きな僕がそう思ったが、ただだけかもしれない」

ネルアスは少し寂しげな笑みを浮かべた。アクヌスの姿をしたものが、それを気づかうかのように彼の頬をそっと撫でた。

「もう一つ聞いていいか。その岩から突き出している鉄の巻き貝みたいなものは何だ」

ネルアスは彼の背後にそびえているものを首をひねって見上げた。

「これかい。これは乗り物らしい。その大きな螺子みたいなのが回転して地中を掘り進むだろうね。扉らしきものがついてはいるけれど、開かない。こうやって岩壁を突き破って侵入しているということは、ここで戦があったのかもしれない。街の中にも焼け落ちたような跡や何かが破裂したような痕が残っているんだ」

「地底の仙境にも戦があったというのか」

ネルアスは自嘲気味に小さく笑った。

「ああ、仙境というのは僕のこうあって欲しいという見方に過ぎない。他にもこうした地下都市があつて、戦いを繰り返していたのかもしれない。地上からの攻撃があつたのかもしれない。ここは地底の要塞だったのかもしれない。まあ、あまりそういう風には見えないけれど」

ネルアスの表情が曇ると、アクヌスに似たものは彼の肩を抱いて撫でさすり、耳元で何かささやいた。

アクヌスは弟の夢幻のような話を黙って聞いていたが、自分と同じ姿をしたものの振る舞いに忍耐の限界に達したらしく、金切り声で叫んだ。

「離れて、弟から離れて、化け物め」

彼女はネルアスに身を寄せるものにつかみかかろうとした。サルドゥゥプスなる生き物はアクヌスと同じ顔に困惑した面持ちを浮かべ、さらにびったりとネルアスに体をくっつけた。

「私のネルアスから離れて」

アクヌスがもう一人の自分を弟から引き離そうとした時、他の黒い生き物が二人の間に身を滑り込ませた。ぬらぬらと光る黒い肌に女の爪が食

い込み、指がずぶずぶとめり込んでいくのが見えた。

「大丈夫だよ、姉さん。彼らは悪さはしないよ」

「何言っているの、それは化け物よ、化け物」

アクヌスが爪を立てた生き物はゆっくりと彼女を押し戻した。黒い腕が女の背中にまわり、優しげに抱きすくめた。

私はフアバーン剣を抜き、彼女のもとへ走ろうとした。だが、何体ものサルドゥーウプスが私を取り囲み、静かに身体を揺らし首を横に振った。そこには敵意はないように感じられた。

アクヌスを抱いた黒いものが姿を変え始めた。それは幾分背が高くなり、肩幅も広くなったようだった。黒い肌の色が薄れ、頭には金茶の髪が現れた。アクヌスはその胸から手を放し、うめくような声をあげて、体を震わせた。彼女の背に回されていた黒い腕は細身だがたくましさもある男の腕になった。

目鼻立ちがはっきりとし、それはもう一人のネルアスとなった。

「ああ、ネルアス、ネルアス」

姿を変えた生き物の口が何事かささやくように動いたかに見えた。それはいかにも優しげな仕草で女の頬に接吻し、乱れた鳶色の髪を撫でさすった。アクヌスの体から力が抜け倒れそうになるのを、もう一人のネルアスはそつと抱き留めてその場に腰を下ろした。

「すぐに慣れるよ、姉さん。彼らは人間を助けるために存在しているんだ。きつと、ずつと待っていたんだ、この地底の街で。人間を忘れないように、その行いを真似していったんだと思う。この街の人々が死に絶えてからどれだけの月日が流れたのかと思うと身が震えるようだ。僕が調べた範囲では人の骨——いや生き物の骨——らしきものは見当たらない。石と硝子と金物以外のものは皆朽ちて塵になってしまったんだ。そこで彼らはずつと待っていたんだ」

アクヌスは自分を抱きかかえている裸の若者と裸の自分が絡みついてるネルアスに交互に目をやり、呆然とした面持ちで頭を抱えた。

七

私が剣を取めるとサルドゥーウプスたちは、ゆっくりと私から離れた。急に疲れを感じて、私は近くの倒れた石柱に腰を下ろした。

「やれやれ、途方もない話だな。ここがあんたの本当の目的地だったのか」
ネルアスは穏やかな笑みを浮かべて答えた。

「そうとも言えない。姉さんはまるで信じてくれなかったけれど、僕もグルーアンの話を完全に信じ込んでいたわけじゃない。あの手稿を書いた先祖はここにたどり着いたわけじゃないんだ。御堂の奥の隧道を探索して一族に伝わる秘密の鉱脈に到達した。さらに周辺の隧道を探っているうちに死者の街に出た。そこで何かに出会って、恐怖のあまり引き返したんだ。多分、その頃から食屍鬼が巣くっていたんだらうね」

「秘密の鉱脈とやらはその先祖が見つけたんだじゃないのか」

「違うね。もっと遡った時代に一族の誰かが発見した——あるいは食屍鬼が何かに教えられた——ものらしい。そのあたりの記録は失われている。あるいは口伝で伝えられていたのかもしれない。いずれにしても鉱脈もグルーアンも半ば幻のようなものだと思うていたんだ。黄金は別だけだね」

「井戸から入った横穴のあれか」

「そう。見た通り、とうの昔に盗み出されていたよ。金脈は死者の街近くの枝分かれした隧道の先にあるはずだけれど、崩落が激しくて道は完全に埋まっていた。レオネイブが地底に沈んだ大地震のせいかもしれない。引き返してきたら食屍鬼と鉢合わせで驚いたよ。手稿によればあの地下の街のあたりにもずつと食屍鬼の隧道が続いていたはずなんだ。本当に鉱脈があったとしても、掘り出すには莫大な資金が必要だろう。たとえ、横穴の黄金があったとしても無理な話だと思う」

「とんだくたびれ儲けつてことか」

ネルアスは私の言葉にうなずきはしなかった。
「そんなことはない。この素晴らしい地底の都を発見したんだ。黄金が盗まれていたのがわかった時、御堂の奥の隧道が崩落しているのを見た時、僕はよほど引き返そうかと思った。でも、この先にまだ何かがあるのではという思いが不思議とその度に沸き起こった。先祖が残した手稿は後代の者をここに導く運命を担ったものだったんじゃないかと思う。姉さん、僕はここで暮らすことにするよ」

アクヌスははっとしたように顔を上げると、弟の姿をとったものの腕を振りほどき、ネルアスの方へ駆け寄った。

「何を言っているの。私と一緒に帰りましょう。黄金なんてなくても、あなたと二人なら、何とか生きていくことはできるのよ。こんな地の底で得体的な知らない化け物と暮らすなんて、どうにかしてるわ」

アクヌスは弟の腕をつかもうとしたが、その手は自分と同じ姿をしたものに阻まれた。背後からはネルアスと同じ姿をしたものが彼女の肩に手をかけた。

ネルアスが姉を見る目には寂しさと憐れみが入り交じっているようだった。

「姉さん、僕はもううんざりなんだ。朽ち果てようとする古い屋敷で、先祖の残したものを切り売りして糊口を凌ぐような日々は。いつのものだかよくわからない借財を取り立てに来る奴らだっているじゃないか。屋敷と土地を奪おうとしているあの大伯父とかいう男、隠された金塊があるのではと押し付けてくる遠縁の女、そういう輩の顔ももう見たくない。僕はここがいい」

アクヌスの姿をしたものの顔には嬉しげな表情が浮かんでいるようにも見えた。

「ネルアス、あなた、やつぱりおかしいわ。どこかで頭を打ったのよ。いえ、書齋にこもりすぎたのよ。いいえ、違うわ。その化け物のせいだわ。私の姿なんてやめて、元の黒い怪物に戻りなさい。ネルアスは私のものよ」

再びアクヌスは自分そっくりのものにつかみかかろうとしたが、弟の姿をしたものが背中から抱きすくめて放さなかった。他の黒い生き物も彼女とネルアスの間にすべるように入り込んだ。

「僕ならそこにいるじゃないか。姉さんもここで暮らせればいい。そのネルアスは何だっけしてくれよ。僕のように書齋に閉じこもって姉さんを拒んだりしない。他の男と寝たっけなじったりしない。姉さんの、姉さんだけのネルアスだ」

ネルアスは口元に幾分歪んだ笑みを浮かべた。

「馬鹿なことを言わないで。私のネルアスはあなただけよ。あなたのアクヌスは私だけよ」

アクヌスの姿をしたものはネルアスの頭を抱え込むようにして、唇を重ねた。ネルアスもそれに応えて、彼女の唇を貪るように吸った。黒い生き物に本当にそういう感情があるのか、それともネルアスの頭に浮かんだものを写し取っているのか、それはわからない。だが、唇を離すとサルドウウプスという生き物は勝ち誇ったような表情で自分と同じ姿の女に視線を送った。

「化け物、返せ、ネルアスを返せ」

アクヌスは大声でわめき散らしたが、ネルアスの姿をしたものは彼女を抱き留めて放さなかった。彼女の怒りの矛先は私に向けられた。

「スナブ・ランケン、何をしているの。この化け物を何とかして。その魔剣で斬り刻んで」

私の手の中の剣は、曖昧な光を放ち、曖昧な感覚を掌に与えているだけだった。この場所で働いているのは魔法なのか何なのか、よくわからなかった。

「君がどこで暮らそうが自由だと思いがね、この地底で食べ物はどうするんだ。あの茸は食べられるのか」

「あれは食べられない。食べると体中が光って死ぬそうだ。もちろん、死体からは茸が生えてくる。食べられるのはこちらということだ」

「それじゃあ、どうやって命をつなぐ」

「まだほんの少ししか調べていないけれど、グルーアンはこの街並みだけじゃないんだ。この広場の拱門の奥には別の岩窟があつてね。そこに農場の跡らしきものがあるんだ。農場といっても四角い石の区切りと水路らしきものが残っているだけだよね。でも、サルドウウプスは種を保存しているんだ。見たことのない種類のものだけだよね。そこを補修することができればと思っている。でもすぐにといいわけにはいかないだろう」

ネルアスは悪戯っぽい、どこか子どものような笑みを浮かべた。

「だから、今はこうやって」

彼はそう言って自分に抱きついていてアクヌスそっくりのものの指先を齧りとった。ネルアスの歯が食い込んだ瞬間、指先は元の黒く滑る様に戻り、銀色の欠けらが一瞬光った。ネルアスは黒い指先を柔らかな蒸し物でも食べるように噛みつぶして飲みこんだ。骨と肉から成るものを食べ

ているように見えなかった。

アクヌスの姿をしたものは痛みを感じている風でもなく、笑みさえ浮かべていた。食い千切られた指先には黒い肉芽のようなものが盛り上がり、見る見る内にそれは元通りの白い指先へと変化した。

「とても美味で、滋養もあるみたいだ。怪我が早く治ったのもこれのお陰なのかもしれない」

「あなた、おかしいわ。どうにかしている。やめて、気分が悪い」

アクヌスは口元に手を当て、丸めた背中を震わせた。彼女を抱きかかえていたものは、さも心配げな仕草で背をさすり、口元に自分の指先を差し出した。はっきりとしない言葉のようなものが聞こえた。

「食べれば気分が良くなると言っているんだ。姉さんも試してみればわかるよ」

アクヌスは「やめて」と大声で叫び、弟の姿をしたものの腕を振り払い、立ち上がった私のもとへ駆け寄った。

「斬って、あの化け物を斬って、私のネルアスを取り戻して」

アクヌスは私の胸を拳で叩いて叫んだ。

「弱ったね。弟さんは帰らないと言っている。無理につれて帰るわけにはいかないだろう」

「あなた、私に雇われているのよ、仕事をしなさい」

「弟さんを捜し出すことはできただろう。後は姉弟の問題だ。僕が口を出すことじゃない」

アクヌスは怒りで顔を赤く染め、六角形の眼鏡の中から私をにらんだ。

突然、彼女は私の腰のファバーン剣に手をやり、引き抜いた。闇雲に振り回して、もう一人の自分と弟の方へ突進した。

私は後を追ったが、彼女を捕まえるよりも先にネルアスの姿をしたものがアクヌスの前に飛び込んだ。ファバーン剣がそれを肩口から斬り裂いた。

血飛沫ではない、粘り気のある黒い滴が飛び散った。刃が触れたところからそれは黒いぬめぬめと光る姿に戻り、人間には不可能なほどく振じれた姿となって、倒れ伏した。

アクヌスは言葉にならない叫び声をあげ、ファバーン剣を投げ捨てた。体に降りかかった黒い滴を両手でこすって落とそうとしたが、それはか

えって広がり、彼女の乳色の肌の中に染み込んでいくようだった。

倒れた黒い生き物は人間の輪郭を徐々に失い、光沢のある泥の塊のようになって蠢いていた。あたりに飛び散った黒い滴は、一滴一滴が生きていくように動いて、大きな塊に溶け込んでいく。

私は剣を拾い上げ、恐慌に陥っているアクヌスの腕を引っ張って、退かせた。斬られた黒い生き物のまわりに他の黒いものたちが集まってくる。

それはいかにも倒れた者を心配し、助けようとしているような姿に見えた。何体かのサルドウゥプスが屈みこみ、指先を仲間の粘土状になった体に押し込んだ。黒い体の銀の星屑のような斑点が大きくなり明滅した。

彼らは互いに手をつなぎ、明滅は仲間の体にも伝わり、ゆらゆらと黒い体を揺らし、身震いさせた。それは奇妙な静かな踊りのようにも見えた。

「姉さん、何て愚かなことを。傷つけられて彼らは悲しんでいるよ」

ネルアスに寄りそうアクヌスの姿をしたものの目からは涙が流れ落ちていた。透明な滴は頬を滑り落ちると黒く色を変え、胸乳に滴ると白い肌に吸い込まれて消えていく。

アクヌスが斬ったものは泥状になった体を次第にもたげ、歪んだ円錐状の形になり、上へとのび上がっていく。まわりの生き物たちと共に揺れ動きながら、それには手足が生え、両腕の間に丸い瘤ができたかと思うと脹らんで頭部となった。それが再び人間様の姿となると、まわりの生き物たちは喉を鳴らすようにして笑い声のようなものを発した。仲間の復活を喜びあっているようにも思えた。

黒い生き物たちは小首を傾げるような仕草を繰り返した。何事か相談でもしているかのようにも見えた。それから彼らはゆっくりとこちらに歩を進め出した。

「何をするつもりだ」

アクヌスの姿をしたものがネルアスの耳元で何かささやいたように見えた。

「姉さんを迎え入れるんだよ、姉さんも僕と同じサルドウゥプスの血を引く者だとわかったから」

アクヌスは激しくかぶりを振りうめく。

「何を言っているの、私はそんな化け物の一族ではないわ。あなたもよ、ネルアス。私たちはヴェネルロック家の人間よ」

ネルアスは落ち着いた声で言った。

「書斎に残された古い文書を調べていてわかったことがある。僕たちヴェネルロック家の祖先は鉾山師だけれど、占杖や振り子を使わなくても、金山を探り当てることのできたらしい。坑道に閉じ込められても奇跡のように生還したり、暗闇でも目が見えたり、不思議な力を持っていたみたいなんだ。もっと遡れば、北の岩山の洞窟に落ちた一族の女性が生きて帰り、その時には身籠もっていたという話もある。赤ん坊は産まれた時には黒くさらさら光る肌をしていたというんだ」

「やめて、ネルアス。そんな話、あなたの妄想だわ。お願いだから私と一緒に帰って」

「それはできないよ、姉さん。僕は待たれていたグルーアンの王だ。姉さんは女王になればいい。僕たちはここに還ってきたんだよ」

先刻アクヌスが斬った黒い生き物は再び形を変え、ネルアスの似姿になりつつあった。

「アク……ヌス」

それは形を成した唇を動かし、彼女の名前を呼んだ。

「やめて、やめて」

他の黒い生き物の視線が妙に私の方に集まっているのを感じた。首を傾げたりささやきあうような仕草を繰り返しながら、三体四体の黒い生き物が近づいてくる。

「あなたもここに残ればいい。みんなあなたに興味を持ったみたいだから。その剣のせいかな。姉さんと寝たんでしょう。それとも、ご先祖に金山師でもいるのですか」

ネルアスは幾らか皮肉めいた笑みを浮かべてそう言った。

「生憎、そういう先祖はいないね」

黒い生き物はじわりじわりと近づいてきた。私たちは後退り、気がつく

と池がすぐ後ろに迫っていた。池から水が湧き出る音が急に大きくなった。振り向くと透き通った水と見えたものが黒く染まり、噴水のように噴き出していた。それは宙で細長い何匹もの蛇のような姿となり、私の首筋や腕に絡みついた。

奇妙な滑らかな感触だった。人肌よりも幾分冷たい触腕は私を締め上げるわけではなく、首や手首でぬるりと蠢いた。不可思議な心地よささえ

感じられた。

その時、掌に痺れるような感覚が走った。ファバーン剣の刀身で神秘文字が緑色に光っていた。私は古の魔剣を振り回し、絡みついた黒い触腕を断ち切った。近づいてくる黒い生き物たちが悲鳴にも似た声を発した。

だが、彼らは歩みを止めはしなかった。一体はネルアスに生き写しに、残りのものたちは黒い体のあちこちを脹らませたりすばませたりして、新たな姿を取り始めた。

一つはネルアスの側のものと同様アクヌスの似姿となった。他のものは別の女——あるいは女怪——の姿となった。いずれもかつて私が寝たことのある女の姿だった。

黒い髪、赤い髪、黄色い髪、白い肌、黄色い肌、褐色の肌、灰色の瞳、黒い瞳、青い瞳、ほっそりとした、あるいは均整のとれた、あるいはふくよかな肢体、黒い生き物たちは様々な姿を取り、一定しなかった。アクヌスの姿となったものも、すぐに他の女へと姿を変えた。

一つの生き物の上に何人もの姿が重なり変化した。顔の左右が別の女のものとなり、体はまた他のものの姿となった。それは決して一つの姿に留まらず、絶えず蠟が溶け出すように姿態を変え続けた。

「スナ……ブ・ラン……ケン」

私の名を呼ぶその声もまた幾人もの女の声が折り重なり、響きあっているように聞こえた。

突然、私は非常な嫌悪と恐怖の感情に囚われ、ファバーン剣を振り回した。神秘文字が輝く刀身が触れると、女の姿をしたものはほとんど手応えもなく斬り裂かれ、頽れた。腕が飛び、首が千切れても、それは悲鳴を上げるでもなく、苦痛の表情を浮かべるでもなかった。私は女の姿をしたものたちを斬り刻み、ネルアスの姿をしたものも一刀両断にした。

アクヌスが剣を振った時と同様、刃に触れた部分は黒い元の姿となり滴になって飛び散った。私はそれが自分の肌に吸い込まれていくのではという恐怖を感じたが、黒い滴は私の肌の上を玉のようになって滑り落ちていった。

池のまわりには黒く変色した女体の残骸のようなものが山となった。飛び散った黒い滴はその黒い山へと集まり、それはぐずぐずと形をなくして、黒い粘土状の大きな塊となった。

黒い塊は泡立つようにあちこちが膨らみ、そこから手足のようなものや頭らしきものが生まれてはまた形を失うということを繰り返した。それはやがて蛞蝓が這うかのようにゆるゆると動いて縁石を越え、池の中に身を沈めた。

アクヌスが引きつった笑い声をあげた。

「死んだわ、化け物は死んだ。さあ、後はあの私の偽物だけよ。あいつもその剣で斬って、あいつも殺して。ネルアスは私のものよ」

瓦礫の玉座の上で彼女の弟は少し困ったような顔をしていた。隣の彼女の姉と同じ姿をしたものは、ただ無表情にこちらを見ていた。私はその表情の無さになぜか恐怖を感じた。

「姉さん、残念だよ」

ネルアスがぼつりと言った。池の中からごぼごぼという音が聞こえた。

「はやく、あれを殺して。あの偽物を殺して。あいつがネルアスを、ネルアスを」

池の中の沸き立つような音が激しくなった。

「そんなことをしても、何にもならないよ」

ネルアスは暗い声でそう言った。

池に黒い水柱が立った。高さは十メートル（約三メートル）はあるだろうか。黒い滑るものが絶えず沸き立っては流れ落ち、それは収まることなかった。黒い水柱には幾つもの顔があった。姉弟の顔、私の関わった女たちの顔だけではなかった。見知らぬ無数の老若男女の顔が現れては消え、現れては消えを繰り返していた。

無数の顔は言葉にならないうめき声、叫び声を発し、沸き立つその上部から黒い触腕のようなものがのびてきた。ぬらぬらと光るその長虫のようなものの先端には人間の手らしきものがついていた。だが、指は四本しかない。触腕は何本も現れるが、先端の手指は本数が定まらない。二本のものもあれば六本のものもあった。

触腕は私たちに迫ってくる。何本も斬り払ったが、斬られたものはまた池に戻り、すぐに新たな腕がのびてくる。黒い水柱はうねるように揺れ動き、さらに背を高くしていく。

「これは駄目だ」

私がそう言ったのは独り言だったのか、アクヌスに向けてだったのか、

自分でも定かではなかった。ファバーン剣の力はサルドウゥプスを滅ぼすことはできず、かえって彼らに某かの活力を与えるのかもしれない。食屍鬼の女王が危ぶんでいたことは正しかったのだろう。

「殺して、化け物を殺してよ。ネルアスを連れて帰るのよ」

アクヌスは甲高い声で叫んだが、黒い水柱が大きく宙をうねり、こちらに迫ってくると恐怖が弟への思いを上回った。彼女は悲鳴を上げながら、石段を駆け落ちるように駆け降りた。

「姉さん、行かないで。一緒になろうよ。ここで、一緒に」

ネルアスの声が聞こえたが、それが壇上から聞こえてくるのか、黒い水柱に浮かぶ顔のどれかがそう言っているのか、よくわからなかった。私もアクヌスの後を追いつ、石段を駆け降りた。

八

私たちはグルーアンの街を走った。廃虚で奇妙な人真似をしていた黒い生き物たちは、始めは無関心な様子だったが、次第に私たちの方へと近づき始めた。遠感の術でも備わっているのだろうか。

何体かが行く手をさえぎるように私たちの前に現れた。女の姿をとつた時には非常な嫌悪を感じたものの、不思議と彼らを敵視する気持ちは浮かんではなかった。黒い生き物に悪意というものは存在しないのだろう。

だが、背後から追ってくるものに捕らえられるのもご免だった。さえぎる黒いものを私は斬り捨て、湖の方へと走った。

背後のものとは不定形な体を変化させながら、川を進んでくる。私が斬った黒い生き物は毀れた石畳を這いうねり、追手の体の中に融合していくようだった。

幾つもの顔、手足、体の一部が溶け合い、消えては現れを繰り返しながら、それは私たちを追ってくる。ネルアスの意志がそれを動かしているのか、それとも黒い生き物自体が私たちを求めているのか、それはわからない。ただ、それが途中で何体もの仲間を飲み込み、三十メートル（約九メートル）ほどの大きさに膨れ上がりながら、細い触腕を何本ものぼして私たちに迫ってくるのは間違いないことだった。

それは川の中で大きな瓦礫や岩にぶつかると乗り越えるのにやや時間を要したが、さえぎるものがなければ、水のようにするすると流れ、私たちに追いつかんとする。先端に歪んだ手のついた触腕が幾度も私たちの体に取り付き、アクヌスは悲鳴を上げ、私は剣を振るって、それを斬り払った。

黒い生き物は時折、声らしきものを発した。「姉さん、一緒に」というネルアスの声に似たものだったが、池と玉座のある広場から離れるにつれ、その声は不鮮明になり、粘ついた泥がはねるようなものになっていった。建物が大きく崩れて半ば道を塞いでいる場所を迂回した時、アクヌスが大きく咳き込んで膝をついた。

「もう走れない。あなた、逃げて。ここで一緒にするのが、私の定めなのかもしれない」

「何と一緒にするんだ。本物か偽物かよくわからない愛しい弟とか、あの黒い化物とか」

「もう無理よ、そうよ、私もあの黒い化物と一緒にするんだわ」

アクヌスは涙をぼろぼろと流し、顔を歪めた。私は悩乱する彼女の腕を取って立ち上がらせようとした。

「地上でもっといい男を探すのが得策というものだ」

その時、非常に不鮮明だが「一緒に」という声が間近で聞こえた。見れば一イトもないところに黒い触腕がゆらゆらと蠢き、その三本指の掌に口らしきものが開いていた。それはまた口の中に泥でも詰め込んだかのような声で、「一緒に」と言った。

恐怖と嫌悪の情が疲労と絶望に打ち勝ち、アクヌスは立ち上がり、また走り出した。私はその黒い腕を斬り払った。瓦礫の山の向こうから幾つもの顔と体の断片を持つものが近づいてくる。

あたりの様子からして、私たちは地底都市の反対側の外れに近づいているようだった。左手に湖に通じる道があるはずだった。白い石の拱門を私は探した。

それらしい拱門と建物との間の細い道が目にとまった。私とアクヌスはその白い石が敷かれた小道に飛び込んだ。薄暗い小路を抜けて湖畔に出ると、湖を渡る石橋に進んだ。

巨大な岩窟に広がる「星空」とそれを映す鏡のような湖面の美しさを堪

能しているゆとりはなかった。私たちは白い石で作られた細い橋を進んだが、まわりに広がる地底の銀河に飲みこまれそうな感覚に、自然と足取りは鈍った。

振り返っても、黒い生き物の姿は見えなかった。ついに振り切ったのかと安堵の念が沸き起こったが、それはすぐに打ち消された。湖畔に続く街並みの左端で何かが動いていた。水音が聞こえてくる。わずかな灯しもなく判然としないが、黒いものが白っぽい岸边を動き、水面に波が立っているようだ。

恐らくそこはブルーアンを流れる川が湖へと流れ込んでいる場所と思われた。黒い生き物は河口から地底の湖へ侵入したのだ。

湖面に映る岩窟の星々がゆつくりと歪み、瞬いた。河口からの波が橋まで届いたのだろう。私たちは橋の上を小走りになって進んだ。右手後ろには湖面を滑るように進む何かが見えた。黒い水面に銀色に光る波が静かに広がっていく。

私たちは七角形の東屋にたどりついた。水面を進むものは少しずつ橋との距離を縮めていた。東屋で休む間もなく、私たちは対岸へと急いだ。緩い下り坂の橋を半ばまで進むと、湖面の黒い生き物はほとんど私たちと並走するまで近づいてきた。彼我の隔たりは四十一トばかりだろうか。

向こう岸が近づくと巨大な茸のもたらす光が黒い生き物にまで届いた。それはどうやら体を卵に尾が生えたような形に変え、身をくねらせて泳いでいるようだった。だが、体に幾つもの顔や手足が浮かび上がるのは変わらず、時折生えた手足が不器用に水を掻いているのが見えた。

それが近づいてくるとまたあの声が聞こえた。「一緒に」という声が泡立つ水音と入り交じって聞こえてきた。

九

私たちはついに橋を渡りきり湖岸に立ったが、黒い生き物もまた私たちから二十イトばかり右手のところ、不定形の体から水を滴らせて岸辺に上がった。私たちが降りてきた穴のある岩室に行くには、立ち塞がるそれを何とかしなくてはならなかった。

水から上がった黒い生き物は、ぶるぶると身を震わせて形を変えつつあった。大きな黒い塊の中の頭や手足は形が整い、粘つくものを滴らせながら塊から離れた。そうして、何体もの人間に似た黒い生き物が塊から生み出されるように現れた。元の塊はその度に小さくなり、私たちの前には十体ばかりのぬめぬめとした肌を持つ黒い生き物が立ち並んだ。

彼らは喉を震わせてくぐもった「一緒に」という声らしきものを発した。最初に出会った時と同じように銀色めいた目以外ははつきりとしなない面立ちだったが、こちらに一歩一歩近づくとつれて、黒い肌の中の銀色の欠けらが明滅し、顔立ちがはつきりし始めた。

先頭に立つものがネルアスの姿を取り始めると、アクヌスが叫んだ。「もう、やめて。もう、いいのよ。あなたはいらない、いらない。あなたなんて大嫌いよ」

拳を握り、髪を振り乱して、彼女はそうわめいた。するとネルアスの姿になろうとしていた黒い生き物は歩みを止めた。上半身をゆらゆらと揺らし、形作られつつあった整った顔や細身だが逞しい体が歪んで収縮を繰り返した。それは再びのっぺりとした人形のような姿となり、戸惑うようにその場で身体を揺らし続けた。

他の黒い生き物たちも立ち止まり、ネルアスになろうとしていたものを囲むようにして体を揺らせた。傷ついた仲間を心配げに見守っているかのようにも見えたが、それもまた人間の真似なのか、わからない。何体かは見覚えのある女の姿に変わる途中らしかったが、その変身も途中で終わったようだった。

私は肩を震わせているアクヌスの身を抱き、揺れ動いている黒い生き物の脇を通り、大岩窟の岩壁の方へと向かった。アクヌスはずっと「もう、いいの。もう、いいの」とつぶやいていた。黒い生き物たちは追っては来なかった。

私たちは三角形に扉が開いている場所にたどりついた。岩室に入ると円柱の薄黄色の灯が円天井に七角形の穴が開いている場所へと私たちを導いた。穴の下へ小石を投げ入れると、それはいったん宙に浮き、それからゆっくりと天井の穴へと吸い込まれていった。

私たちは七角形の穴の下に立った。靴底が押し上げられるような力を感じ、不可思議な力が私とアクヌスの体を浮かび上げ、上へ上へと運

んでいった。

薄黄色に光る奇妙な穴の中を私たちは昇り続け、やがて穴の上へと浮かび上がった。穴を囲む階段状の窪みへと足を移すと、私もアクヌスも一気に体の力が抜けたようになり、その場に膝をついた。言うようにして窪みを登り、崩れかけた岩室の壁の裂け目からわずかに見える灯を頼りに地下納骨堂への道をたどった。

岩の裂け目を通り抜けると、見覚えのある薄青い光があった。死霊術師の杖が岩壁に立て掛けられて、ぼんやりとした灯を点していた。

その光の輪の端の方で黒い影が蠢いていた。私はフアバーン剣を抜いて身構えた。すると影は動きを止め、二つに分かれた。

「誰だ、邪魔をする奴は」

青白い光に照らされてモルクナントの呪文の書かれた頭が浮かび上がった。その後ろに食屍鬼の女王の顔も見えた。ディジャラーグは不愉快そうにこちらに向かって牙をむき出しにして見せた。

「何だ、お主たちか。てっきり地の底の底で死んだと思っておった。あの穴は帰日も動いたのだな」

「ああ、お陰様でね」

死霊術師は杖をつかんで私たちに灯を向けた。

「はあ、ひどい顔だな。うむ、ひどい顔だ。とくと話を聞きたいところだが、まずは地上に戻って休んだ方が良からう」

モルクナントはディジャラーグに何かさぼそぼと話をし、食屍鬼は不満げな唸り声をあげた。死霊術師はなだめるようにディジャラーグの肩を抱き、また何かささやいた。

「やれやれ、また死体安置所を漁るか」

モルクナントはぶつぶつと独り言を言いながら、私たちを地下納骨堂へと導いた。壊れかけた棺の並ぶ棚の一角にある幅の狭い拱門の前に私たちは連れて行かれた。

「ここを入ると細い通路と階段が続いている。このところ地震はないから、多分崩れてはいないだろう。ずっと登るとインヴァレの共同墓地の納骨堂に出る。ここが一番の地上への近道だ。レオネイブからの道もあるが、あつちは下水を通っている面倒だ。ここに行くが良い。ああ、灯がない」

死霊術師は近くに転がっていた頭蓋骨の欠けらを手に取ると、杖の先端の青い灯をその内側に押しつけた。頭骨の皿の中に薄青い光が点った。

「地上に出るまでは持つだろう」

私は灯を受け取り、礼を言った。

「何、土産話を楽しみをしているぞ」

私はモルクナントに住まいを尋ねたが、彼はこちらから使いを送ると答えた。妖術使いは杖を掲げて、もう一度私たちの顔を見た。

「ふむ、ひどい顔だ」

私たちは足を引きずるようにして狭い隧道を通り、階段を登った。近道だという話だったが、地上への道は無限に続くかに感じられた。骨の皿の中の灯はゆらゆらと揺れ、幾度か消えそうになった。

やがて上方に不定形の狭い穴らしきものが見えた。近づくとそれはどうやら少しだけずらされた石棺の蓋のようだった。そのままでは通り抜けられないので、蓋の縁に手をかけ動かし、ようやく一人ずつ出られるだけの隙間を開けた。

石棺から出ると、湿った草のにおいが鼻に飛び込んできた。虫の音がやけに大きく聞こえる。そこは朽ち果てた納骨堂で、大きく破れた天井から曇った夜空が見えた。月が雲の向こうからぼんやりとした光を放っている。やがて、雲が切れて差し込んだ月光はひどく眩しく感じられ、私もアクスも目を伏せるしかなかった。

十

しばらくたったある夜、クラシーヤ街で酒を飲み探偵局に戻ると、机の上に通の手紙が置かれていた。宛名も差出人もなく、泥で汚れた封筒を開くと読み難い詰屈な文字で「今宵、インヴァレの共同墓地で」とだけ記してあった。

墓場に赴くと打ち捨てられた納骨堂に青白い灯が見えた。モルクナントは石棺の上に腰を下ろし、細長い瓶から細長い硝子の杯に酒を注いでいた。酒杯は二つあり、私が挨拶をすると彼は私の分の酒を注いでいた。

「心配はいらない。ただの葡萄酒だ。どこぞの地下蔵にあった年代物だ」

酒は渋味が強くあまりうまいとは思えなかった。年代物でも元が安酒だったのかもしれない。

「さて、話を聞かせてくれ。穴の底はどうなっていた。地底の都是本当にあったのか」

私はグルーアンであったことを死霊術師に話した。時折彼は質問を挟み、納得するようにうなずき、また、信じられないという風に首を振った。私が語り終えるとモルクナントは独り言のようにこう言った。

「実に興味深い。興味深い話だが、お主の話を聞くに留めておくのが、賢い判断というものだろう」

私はうなずいて彼に同意を示したが、死霊術師が黒い生き物に遭遇する様を見てみたいような気もした。彼らは何を感じ取り、どのように姿を変えられるのだろうか。食屍鬼の女王の姿にもなるのだろうか。

「ところで、アクススという女はどうしている」

私は彼に問い返した。

「あなたが知っているのではないのか」

モルクナントは訝しげな面持ちで私を見た。

「何を言っている。私を知るわけがない」

「あの地下納骨堂と穴には行っていないのか」

「私は食屍鬼ではない。あそこを住み処としているわけではないのだ」

死霊術師はここ数日地下には行っていないと言った。

「アクススはいなくなつた。三日前にヴェネロック家から報告が来た。

一人で地下に降りていったらしい」

「グルーアンへ、弟のもとへ行つたということか」

「おそろくは」

少しの沈黙の後、モルクナントは言った。

「捜しには行かないのか」

「そういう依頼は受けていない。執事に屋敷も土地も財産も譲るといふ書類が残っていたそうだ」

「そうか。黒い生き物にかしずかれて地底の女王も悪くないかもしれないな」

「地の底で永遠の痴話喧嘩かもしれないが」

妖術使いは鼻にしわを寄せて皮肉な笑いを漏らした。

私たちは黙って少し葡萄酒を飲んだ。死霊術師が口を開いた。

「我々は皆、そのサルドゥウプスとやらの血を引いているのかもしれない。知っているか、人間は〈大いなる厄災〉で一度すべて滅びたという話を」

「滅びかけたという話ではないのか」

「いや、すべて滅び去ったという話だ。滅亡の後に新たに作られたのが、今の我々だという話だ」

「作られたって、誰にだ。造化の神にか」

「古い人間が作り出した〈僕〉によってだ。〈僕〉たちは主の人間がいなくなったことを悲しんだ。それで古い人間が残した術——魔術なのか、もつと恐るべき秘法なのか——によって、新たに人間を作ったという話だ。だが、新しい人間も愚かしきに変わることはなく、再び〈大いなる厄災〉が起こり……」

私は死霊術師の話を遮った。

「それでは話が堂々巡りじゃないか」

モルクナントは薄笑いを浮かべ、こめかみのあたりに書かれた呪文をこすった。奇妙な文字が虫のように動いたように見えた。

「そうだな、これは食屍鬼の間に伝わる戯れ言だよ」

その時、モルクナントが座っていた石棺の下から物音が聞こえた。死霊術師が立ち上がると、黒い鉤爪のある手が棺の蓋を横にずらし、青白い生き物が顔を出した。

ディジャラークはモルクナントに何事か不満げにつぶやき、私の方を見て苛立たしげに唸った。

「お主はとも嫌われているようだ。その剣のせいだろう。まあ、機会があればまた会おう」

死霊術師は食屍鬼の女王に引っ張られるように石棺の中に姿を消した。棺の中をのぞいてみたが、真っ暗な闇が続いているだけだった。

私は残された酒を杯に注ぎ、地底に蠢くものたちのために一人杯を干した。